2014 年度
調査報告書

オリンピアンのキャリアに関する実態調査

笹川スポーツ財団
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

〔共同研究者〕
（株）ポリゴン　代表取締役　田中ウルヴェ 京

目　次

Ⅰ．要旨 ---------- 1

Ⅱ．調査の概要 ---------- 1

Ⅲ．調査結果 ---------- 3

1　回答者の基本属性---------- 3
1-1　回答者の性別
1-2　回答者の年代
1-3　出場競技
1-4　オリンピック出場大会
1-5　オリンピック出場回数と出場時の成績および所属
2　競技経験---------- 11
2-1　各年齢における競技経験
2-2　オリンピックに出場した競技以外の競技経験
2-3　競技の開始と継続の要因
3　競技を継続するための経費---------- 25
3-1　競技にかかる経費の管理
3-2　夏季・冬季別にみる競技を継続するための経費の自己負担額
3-3　競技にかかる経費の収入割合と強化費
4　引退後のキャリア ---------- 31
4-1　引退年齢
4-2　引退の理由
4-3　現在の職業と雇用形態
4-4　現在の職業の選定理由
4-5　現在の職業への入職経路
4-6　現在の年収
4-7　引退後の競技との関わり
5　考察 ---------- 41

付録－調査票 ---------- 45

Ⅰ．要　旨

○回答した 473 人のオリンピアンのうち、313 人はオリンピックへ 1 回出場し、149 人が 2 回以上の出場経験があった。残りの 11 人は、モスクワ大会への出場予定者であった。
○オリンピックに出場した競技を開始した年齢の全体平均は 13.3 歳で、性別にみると男性が 14.1 歳、女性が 11.7 歳だった。
○オリンピック競技を開始してから、オリンピックに出場するまでの年数の全体平均は 10.0 年で、性別にみると男性が 9.7 年、女性が 10.7 年であった。
○オリンピックに出場するまでの過程で、自身がオリンピックに出場した競技以外の経験をもつのは 264 人であった。このうち、1 競技を実施したのは 153 人で半数を超え、2 競技が 72 人、3 競技が 29 人と続いた。
○競技を継続するために 1 年間にかかる経費を、夏季と冬季の大会別・性別の平均額をみると、夏季大会出場の男性が 206.2 万円、女性が 250.7 万円で、冬季大会出場の男性が 245.4 万円、女性が 460.9 万円であった。
○オリンピアンの引退年齢の平均は、全体が 29.9 歳で、男性が 31.1 歳、女性が 26.9 歳と、男性が 5 歳ほど上回った。
○引退したオリンピアンの約 3 割が競技団体の役員や強化スタッフとして従事する一方、約 2 割が競技に関わっていない。

Ⅱ．調査の概要

本調査の目的

2020 年東京オリンピック・パラリンピック開催およびその後の社会において、オリンピアンがより効果的にスポーツ界に貢献できる環境の整備を進めるにあたり、オリンピアンの現状を包括的に把握することの重要性に鑑み、わが国のオリンピアンのキャリアに関する基礎資料の収集を目的とした。

調査対象

（特非）日本オリンピアンズ協会に登録のある会員 965 人。

調査項目

①基本属性

オリンピック出場回数、オリンピック出場年

②競技経験について

オリンピック出場競技の競技実績、オリンピック出場競技以外の競技経験、オリンピック競技の開始と継続の要因

③競技にかかる経費について

経費の管理者、競技別の年間経費、経費の収入割合

④引退後のキャリアについて

引退の理由、現在の職業と雇用形態、現在の職業への入職経路、引退後の競技との関わり

調査期間

2014 年 10 月～11 月

調査方法

郵送法による質問紙調査

調査協力

（公財）日本オリンピック委員会、（特非）日本オリンピアンズ協会

調査メンバー

田中 ウルヴェ 京　（株）ポリゴン　代表取締役、笹川スポーツ財団　理事
吉田 智彦　笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所 研究員
髙橋　光　笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所 研究員

Ⅲ．調査結果

１．回答者の基本属性

１−１　回答者の性別

本調査では、日本オリンピアンズ協会（以下、OAJ）に登録のある会員 965 人のうち、473 人から回答を得た。はじめに、回答者の男女比をみると「男性」が 69.6%、「女性」が 30.4%であり、男性が 2 倍以上を占めた（表 1)。オリンピックの夏季と冬季の出場大会別に男女比をみると、夏季大会では「男性」が 70.5%、「女性」が 29.5%、冬季大会では「男性」が 65.6%、「女性」が 34.4%といずれも男性が大幅に上回った。2015 年 3 月時における OAJ 会員の男女比は、男性 68.0%、女性 32.0%であることから、本調査の男女比は全体構成と近似しているといえる。またこの比率は、これまでオリンピックに出場したすべての日本人オリンピアンの男女比とも近い値である（表 2)。

表 1　回答者の性別　（%）

	全体(n=473)	夏季(n=376)	冬季(n=96)
男性	69.6	70.5	65.6
女性	30.4	29.5	34.4

※夏季・冬季の両大会に出場した男性 1 人は「全体」のみに含めた。

表 2　オリンピック大会への出場者の性別　（%）

	全体(n=5,192)	夏季(n=3,955)	冬季(n=1,237)
男性	68.9	68.8	69.0
女性	31.1	31.2	31.0

日本オリンピック委員会ウェブサイトより作成（2015）

１－２　回答者の年代

回答者の年齢をみると、全体の平均年齢は 56.8 歳であった（表 3)。夏季大会出場の男性の平均年齢が 62.3 歳で最も高く、冬季大会出場の女性の平均年齢が 36.1 歳で最も低い。

年代別にみると、「60 代以上」が 46.9%と最も高く、回答者のほぼ半数にのぼる（表 4)。次いで「40 代」18.8%、「50 代」17.1%と続き、40 代以上が全体の 8 割をしめた。

夏季・冬季大会別および性×年代別にみると、夏季大会出場者では「60 代以上男性」が 41.5%と最も高く、「50 代男性」16.0%も含め、比較的に高齢の年代では男性の割合が高い（表 5)。一方、回答数は少ないものの、「40 代」以下では、男女とも回答のない「10 代」を除き、すべての年代で女性の割合が男性を上回った。冬季大会出場者では、夏季と同様に「60 代以上男性」29.2%が最も高かったが、「40 代男性」（17.7%）と、「30 代女性」（16.7%）で夏季より高い割合を示した。

表 3　回答者の平均年齢　（歳）

全体(n=473)	夏季		冬季	
	男性（n=265）	女性（n=111）	男性（n=63）	女性（n=33）
56.8	62.3	51.6	53.8	36.1

表 4　オリンピアンの構成比（年代別、n=473）　（%）

年代	全体
10代　（n=4）	0.8
20代（n=21）	4.4
30代（n=56）	11.8
40代（n=89）	18.8
50代（n=81）	17.1
60代以上（n=222）	46.9

表５　オリンピアンの構成比（年代別×性別）

（％）

年代	性別	夏季（n=376）	冬季（n=96）
10代	男性	0.0	2.1
	女性	0.0	2.1
20代	男性	0.8	4.2
	女性	1.9	7.3
30代	男性	4.0	7.3
	女性	4.8	16.7
40代	男性	8.2	17.7
	女性	9.3	5.2
50代	男性	16.0	5.2
	女性	4.3	0.0
60代以上	男性	41.5	29.2
	女性	9.3	3.1

※夏季・冬季の両大会に出場した男性１人は集計から除外した。

１－３　出場競技

夏季・冬季大会別に出場競技をみると、夏季は 27 競技、冬季は 8 競技の回答があった（表 6)。夏季競技では、「水泳」が 76 人と最も多く、以下、「バレーボール」38 人、「陸上競技」30 人、「体操」28 人、「ボート」23 人と続く。冬季競技では、「スキー」38 人が最も多く、「スケート」18 人、「アイスホッケー」16 人、「ボブスレー」10 人と続いた。回答者の中には複数回出場の経験者も多数いるが、複数の競技で出場したオリンピアンは男性 1 人のみであった。該当者は夏季と冬季の両大会に出場し、競技は夏季では「陸上競技」、冬季では「ボブスレー」に出場した。

表 6　オリンピック競技別の出場者数（n=472）　（人）

No.	夏季競技	出場者数
1	水泳	76
2	バレーボール	38
3	陸上競技	30
4	体操	28
5	ボート	23
6	レスリング	15
7	バスケットボール	14
8	射撃	13
9	フェンシング	13
10	サッカー	12
11	セーリング	12
12	馬術	12
13	ハンドボール	12
14	ウエイトリフティング	11
15	自転車	11
16	柔道	11
17	カヌー	10
18	ボクシング	7
19	卓球	5
20	アーチェリー	4
21	近代五種	4
22	テニス	3
23	バドミントン	3
24	ホッケー	3
25	野球	3
26	トライアスロン	2
27	ソフトボール	1
合　計		376

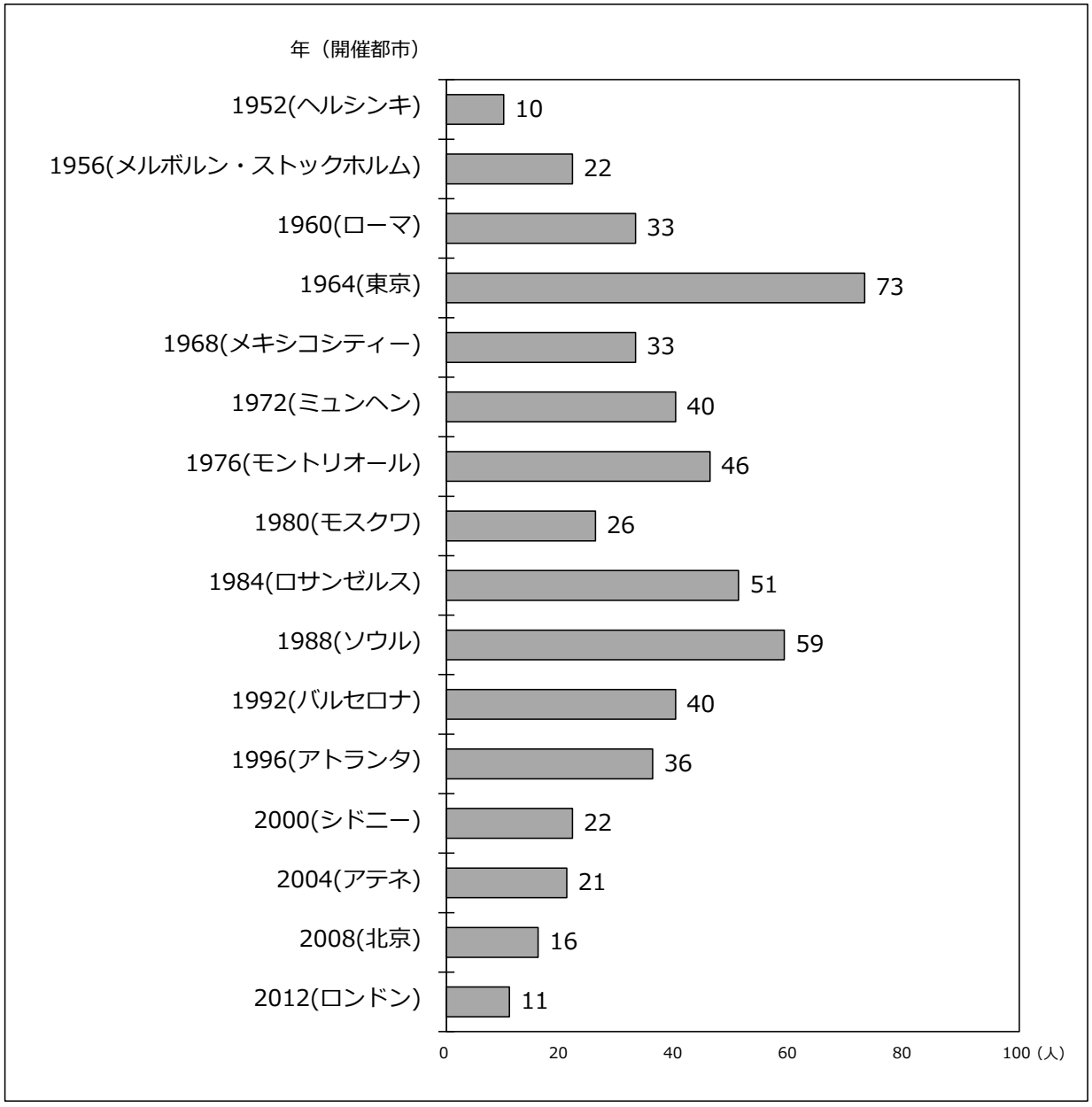
No.	冬季競技	出場者数
1	スキー	38
2	スケート	18
3	アイスホッケー	16
4	ボブスレー	10
5	カーリング	4
6	バイアスロン	4
7	リュージュ	4
8	スケルトン	2
合　計		96

※夏季・冬季の両大会に出場した男性 1 人は集計から除外した。

１−４　オリンピック出場大会

図１に、夏季大会出場者の分布を示した。最も古いのは 1952 年の第 15 回ヘルシンキ大会で、直近 2012 年の第 30 回ロンドン大会まで 16 大会に渡り回答を得た。回答者が最も多かったのは「1964 年東京大会」73 人で、次いで「1988 年ソウル大会」59 人、「1984 年ロサンゼルス大会」51 人、「1976 年モントリオール大会」46 人、「1992 年バルセロナ大会」40 人と続いた。「1964 年東京大会」が最も多いのは、これまでの夏季大会のなかで出場者数が最大（355 人）であったためと考えられる。

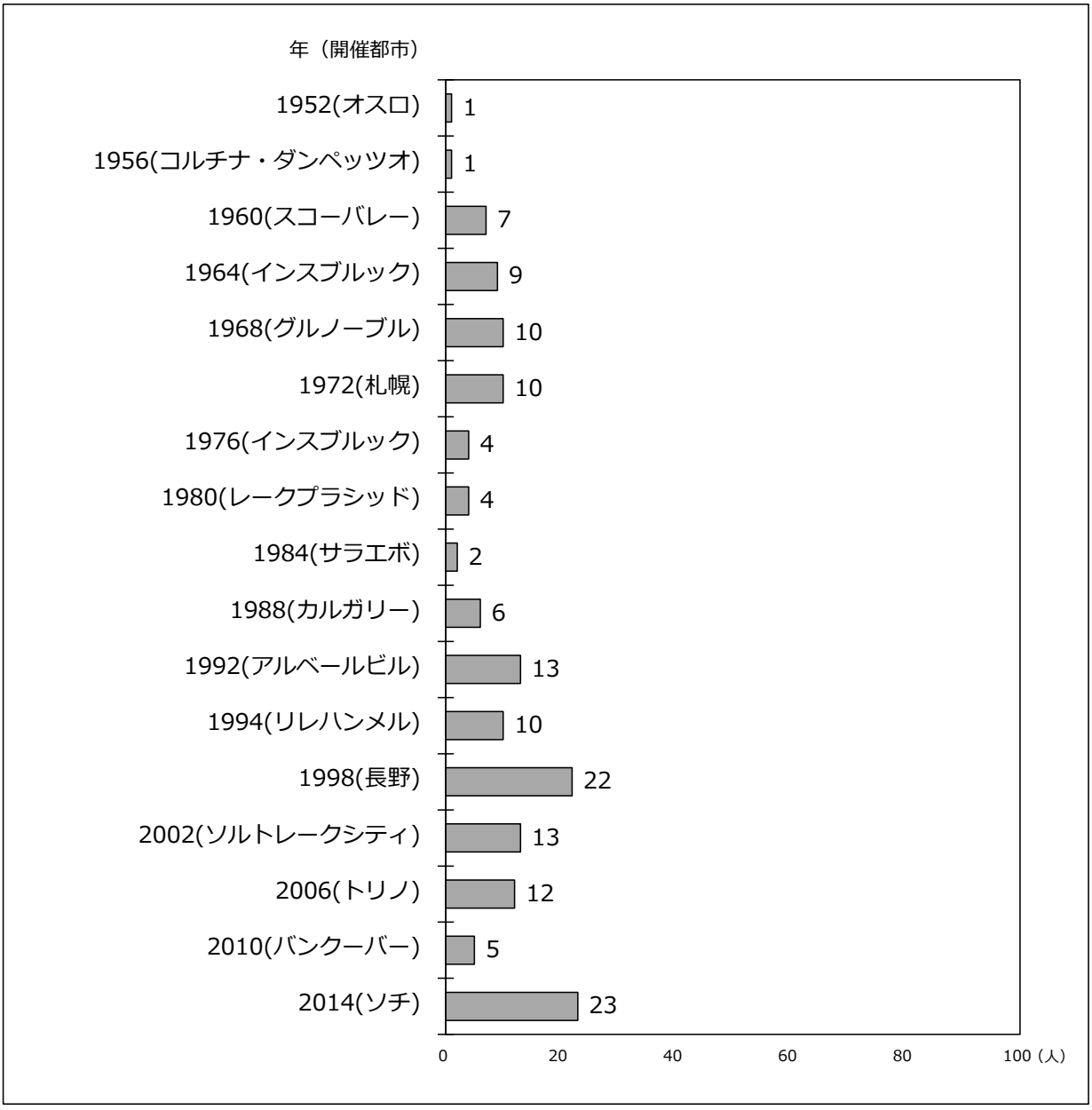
図１　オリンピック夏季大会別の出場者数の分布（複数回答）



※1980 年モスクワ大会は出場予定者。

図 2 に、冬季大会出場者の分布を示した。最も古いのは 1952 年の第 6 回オスロ大会で、直近 2014 年の第 22 回ソチ大会まで 17 大会に渡り回答を得た。回答者が最も多かったのは「2014 年ソチ大会」23 人で、次いで「1998 年長野大会」22 人、「1992 年アルベールビル大会」「2002 年ソルトレークシティ大会」13 人、「2006 年トリノ大会」12 人と続いた。夏季大会の「1964 年東京大会」同様、「1998 年長野大会」は、これまで日本が参加した冬季大会のなかで最も出場者が多く（166 人）、回答者も多かったと推察される。

図 2　オリンピック冬季大会別の出場者数の分布（複数回答）



1−5　オリンピック出場回数と出場時の成績および所属

表 7 に、オリンピックへの出場回数と出場時の成績および所属を示した。なお、回答を得た 473 人のうち、モスクワ大会へ出場を予定していたオリンピアンは出場時の成績と所属が記せないことから、同大会「1 回」のみ出場予定だった 11 人を除外し、複数回出場のうち同大会への出場予定を含む場合は、その分を差し引いて集計した。

オリンピックの出場回数をみると、集計の対象とした 462 人のうち、「1 回」出場したオリンピアンは 313 人（67.7%）であり、複数回出場したオリンピアンは 149 人（32.3%）であった。2 回以上の出場者数は、2 回（99 人）、3 回（40 人）、4 回（9 人）と回数が増えるに連れて減少する。本調査で 5 回出場と回答したオリンピアン 1 人の出場競技は、「アーチェリー」であった。

次にオリンピックでの成績をみると、「1 回」出場したオリンピアン 313 人のうち、「メダリスト」は 48 人（15.3%）、「4〜8 位」60 人、「25 位以内」112 人、これら以外の成績は 86 人であった（無回答 7 人）。複数回出場したオリンピアンでは、「2 回」出場した 99 人の成績は、「1 回目」と「2 回目」に大きな差はみられなかった。「3 回」出場では、「1 回目」から「2 回目」にかけて 8 位以上の人数が増えたが、「3 回目」では「25 位以内」が最も多かった。「4 回」以上の出場者は、比較的高い成績で安定していた。「メダリスト」に着目すると、「2 回」出場したオリンピアンの 1 回目は 24 人(24.2%)、2 回目は 21 人(21.2%)であり、「3 回」出場したオリンピアンの 1 回目は 10 人(25.0%)、2 回目は 10 人（25.0%）、3 回目は 5 人（12.5%）と、複数回出場しているオリンピアンに「メダリスト」の割合が高いことがわかった。

オリンピック出場時の所属についてみると、「1 回」出場したオリンピアンは「民間企業」が 134 人と最も多く、次いで「大学生・院生」87 人、「教職員」24 人、「高校生」16 人などと続いた。一方、複数回出場したオリンピアンをみると、「2 回」出場したオリンピアンの「1 回目」は「民間企業」と「大学生・院生」が 34 人と最も多く、「2 回目」では「民間企業」が 52 人と最も多い。この傾向は「3 回」と「4 回」の出場者における所属の変遷にも共通してみられる。学生から企業へ就職する際、競技を継続する環境が整っている民間企業への就職状況がみてとれる。

表 7 オリンピックへの出場回数と成績および所属（n=462）

（人）

出場回数	1回	2回		3回			4回				5回（以上）				
n=462	313	99		40			9				1				
成　績	1回目	1回目	2回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	4回目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
メダリスト	48（15.3）	24（24.2）	21（21.2）	10（25.0）	10（25.0）	5（12.5）	3	3	2	1	1	－	－	－	1
４～８位	60（19.2）	22（22.2）	20（20.2）	5（12.5）	12（30.0）	9（22.5）	2	1	3	3	－	1	－	－	－
２５位以内	112（35.8）	33（33.3）	34（34.3）	18（45.0）	11（27.5）	20（50.0）	2	4	3	3	－	－	1	1	－
上記以外	86（27.5）	17（17.2）	20（20.2）	7（17.5）	6（15.0）	6（15.0）	2	1	1	2	－	－	－	－	－
無回答	7（2.2）	3（3.0）	4（4.0）	－	1（2.5）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
所　属	1回目	1回目	2回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	4回目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
民間企業	134	34	52	14	28	28	3	6	6	6	－	－	－	－	－
自衛官・警察官	12	8	10	3	3	4	－	1	2	2	－	－	－	－	－
上記以外の公務員	8	1	3	1	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
教職員	24	7	14	1	4	3	1	1	1	1	－	1	1	1	1
大学生・院生	87	34	11	16	1	－	5	1	－	－	1	－	－	－	－
高校生	16	9	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
その他	24	5	6	3	2	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
無回答	8	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

※1　出場回数 1～3 回の成績欄の（）は％。
※2　出場回数が 1 回と回答したオリンピアンのうち、1980 年モスクワ大会への出場予定者は集計から除外した。複数回出場の場合は、同大会分を差し引いて算出。
※3　表内の「-」は回答が無いことを表す。

２．競技経験

本調査では、オリンピアンの競技経験に関して、競技を開始してからオリンピックに出場するまでの年齢、オリンピックに出場した競技以外の競技経験、競技の開始と継続の要因についてたずねた。競技の年齢では、「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」から段階的にステップアップして大会レベルがあがり、「はじめてオリンピックに出場した年齢」までの平均的な年数や、夏季大会と冬季大会の違いなどをみている。

オリンピックに出場した競技以外の経験では、実施した競技と年齢、組織の形態、競技レベルを追った。特に、中学校期以降の運動部活動や大学での体育会運動部における他競技の経験は、競技力の基盤をつくりながら、競技転向に順応する多様な運動能力を培ったことを示している。

また、競技経験の心理的な側面を知るために、競技を始めたきっかけと、継続の要因についてもたずねた。

２−１　各年齢における競技経験

表 8 に、「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」から、「はじめてオリンピックに出場した年齢」の過程を示した。「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」をみると、回答を得た 436 人のうち、最年少は男女ともに 0 歳、最高齢は男性で 30 歳、女性で 25 歳であった。0 歳と回答したオリンピアンの実施競技は男女とも「水泳」であることから、実際には競技を開始したというよりも民間スイミングクラブ等で競技環境に触れた年齢と考えられる。最も開始が遅かった競技は、男性が「クレー射撃」で女性が「ボブスレー」であった。開始年齢の全体平均は 13.3 歳であり、男性の平均は 14.1 歳、女性の平均は 11.7 歳と、女性の方が競技の開始が早いことがわかる。

大会出場の年齢をみると、「都道府県大会に出場した年齢」の全体平均が 14.9 歳、「日本選手権大会に出場した年齢」が 18.0 歳であり、それぞれ競技開始から 3〜6 年の競技経験により実績が高まるとともに、大会レベルが上昇していることがうかがえる。競技により選考基準は異なるものの、日本選手権大会あるいは国際大会での実績が評価されてオリンピック代表選手となる。なお、都道府県大会出場の最年少の競技は、男性が「柔道」で女性が「スケート」であり、日本選手権出場の最年少の競技は、男性が「スキー」で女性が「水泳」であった。「はじめてオリンピックに出場した年齢」の全体平均は 23.3 歳であり、男性の平均は 23.8 歳、女性の平均は 22.4 歳であった。競技の開始が早い女性は、オリンピック出場の年齢も低かった。

また、「最初にオリンピック出場を目標にした年齢」という心理面をみると、男性平均は 19.0 歳、女性平均は 17.5 歳であった。このことから、オリンピック出場を意識するのは、日本選手権大会にはじめて出場し、オリンピック出場が現実味を帯びる頃に多いと推測される。一方で、最年少で 4 歳、最年長で 38 歳でオリンピック出場を目標とする例もあった。

表 8　競技経験の過程における年齢

（歳）

		平均年齢	最年長	最年少
オリンピックに出場した競技を開始した年齢	全体(n=436)	13.3	30	0
	男性(n=302)	14.1	30	0
	女性(n=134)	11.7	25	0
都道府県大会に出場した年齢	全体(n=395)	14.9	35	5
	男性(n=269)	15.6	35	5
	女性(n=126)	13.6	26	5
日本選手権大会に出場した年齢	全体(n=420)	18.0	38	10
	男性(n=295)	18.8	38	10
	女性(n=125)	16.3	30	10
最初にオリンピック出場を目標にした年齢	全体(n=428)	18.5	38	4
	男性(n=297)	19.0	38	4
	女性(n=131)	17.5	34	5
はじめてオリンピックに出場した年齢	全体(n=436)	23.3	44	14
	男性(n=302)	23.8	44	15
	女性(n=134)	22.4	38	14

次に、競技経験の過程を夏季大会と冬季大会で比べた（表 9）。「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」から「最初にオリンピック出場を目標にした年齢」までの平均年齢は、いずれも男女とも夏季大会出場者が冬季大会出場者を上回る。冬季大会の方が競技を開始した年齢が若いが、「はじめてオリンピックに出場した年齢」は両大会での差はみられなかった。

表 9　夏季・冬季大会別の競技経験の過程における年齢

（歳）

			平均年齢	最年長	最年少
オリンピックに出場した競技を開始した年齢	夏季	男性 (n=245)	14.5	30	0
		女性 (n=102)	11.9	20	0
	冬季	男性 (n=56)	12.4	27	2
		女性 (n=32)	11.0	25	3
都道府県大会に出場した年齢	夏季	男性 (n=218)	15.9	35	5
		女性 (n=98)	13.7	24	6
	冬季	男性 (n=50)	14.0	24	6
		女性 (n=28)	13.3	26	5
日本選手権大会に出場した年齢	夏季	男性 (n=241)	19.1	38	14
		女性 (n=96)	16.4	30	10
	冬季	男性 (n=53)	17.2	24	10
		女性 (n=29)	15.8	26	12
最初にオリンピック出場を目標にした年齢	夏季	男性 (n=240)	19.2	38	6
		女性 (n=100)	17.8	34	5
	冬季	男性 (n=56)	18.1	32	4
		女性 (n=31)	16.3	30	5
はじめてオリンピックに出場した年齢	夏季	男性 (n=245)	23.8	44	17
		女性 (n=102)	22.2	38	14
	冬季	男性 (n=56)	23.5	32	15
		女性 (n=32)	22.9	34	15

※夏季・冬季の両大会に出場した男性 1 名の回答は含まない。

表 10 ではオリンピアンが競技を開始してからオリンピックに出場するまでの年数に着目し、その差をみた。回答を得た 436 人の「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」と「はじめてオリンピックに出場した年齢」の差の平均は 10.0 年で、男性の平均が 9.7 年、女性の平均が 10.7 年であり、オリンピック出場までは約 10 年の経験が必要であった。出場までの年数が 1 年であったのは「水泳」「ボート」「カヌー」「ボブスレー」と複数の競技でみられ、最高の 28 年は「馬術」であった。同様に、夏季大会と冬季大会への出場者の競技開始から出場までの平均年数をみると、冬季大会がオリンピック出場まで 2 年ほど長かった（表 11）。

表 10　競技開始からオリンピック出場までの年数　（年）

	平均年数	最大年数	最少年数
全体(n=436)	10.0	28	1
男性(n=302)	9.7	28	1
女性(n=134)	10.7	27	1

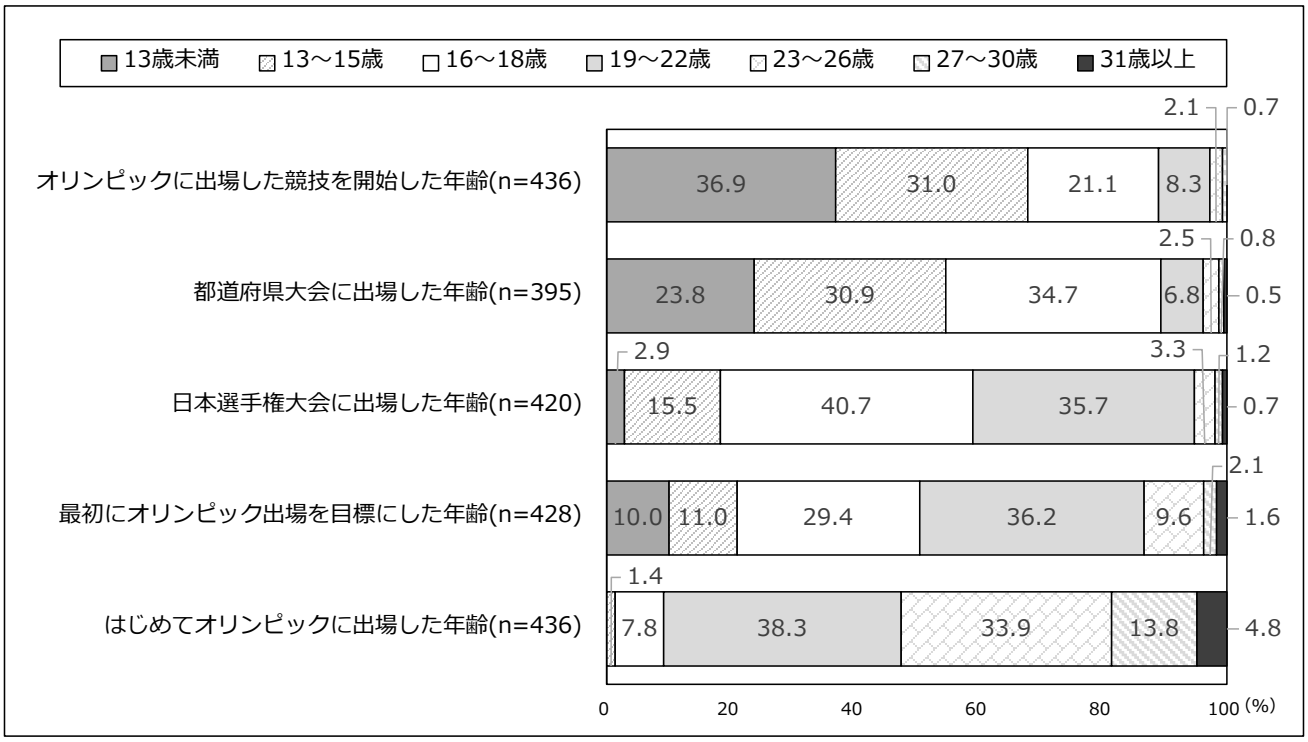
表 11　夏季・冬季大会別の競技開始からオリンピック出場までの年数　（歳）

		平均年数	最高齢	最年少
夏季	男性(n=245)	9.4	28	1
	女性(n=102)	10.3	26	1
冬季	男性(n=56)	11.1	22	1
	女性(n=32)	11.9	27	3

※夏季・冬季の両大会に出場した男性１名の回答は含まない。

図 3 に、「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」から「はじめてオリンピックに出場した年齢」までを年代別に示した。「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」では、13 歳未満の割合が 36.9%と最も高く、次いで 13～15 歳の 31.0%と、15 歳までに 6 割以上のオリンピアンが競技を始めていた。また、年代が上がるにつれて競技大会のレベルも高まることが読み取れる。「はじめてオリンピックに出場した年齢」は 19～22 歳の 38.3%が最も多く、次いで 23～26 歳の 33.9%だった。「オリンピックに出場した競技を開始した年齢」の 31 歳以上と、「はじめてオリンピックに出場した年齢」の 13 歳未満には回答者がいなかった。

図 3　競技経験の過程の年代別割合



2-2　オリンピックに出場した競技以外の競技経験

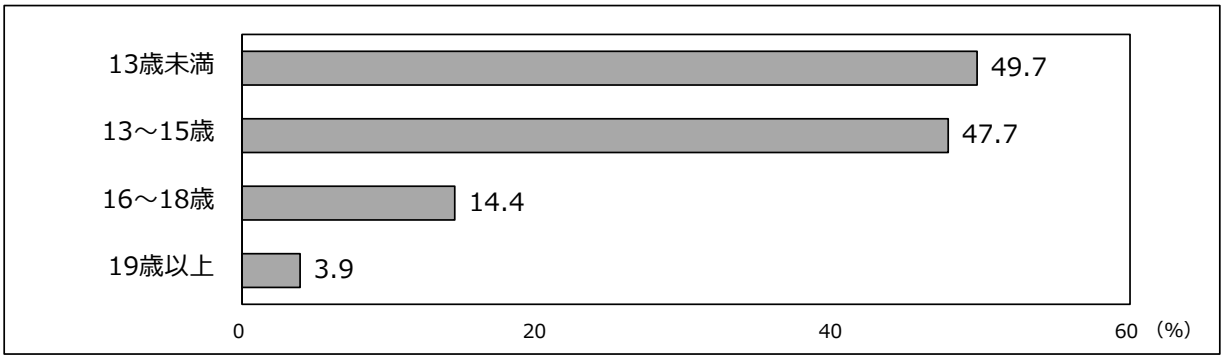
オリンピックに出場するまでの過程において、自身がオリンピックに出場した競技以外での競技経験をたずねた。他競技の実施経験を有するのは 264 人で、本調査への回答者 473 人の 55.8%にあたる。このうち、半数を超える 153 人がオリンピック出場競技とは別の競技を 1 つ実施していた（表 12)。2 競技以上では、競技数が増えるにつれて実施者数は減るものの、4 競技以上を実施していたオリンピアンもいた。多様な競技に対応できるオリンピアンの運動能力の高さがうかがえる。

表 12　オリンピックに出場した競技以外の実施競技数（n=264）　（人）

実施競技数	1競技	2競技	3競技	4競技	5競技	6競技
他競技実施者	153	72	29	5	3	2

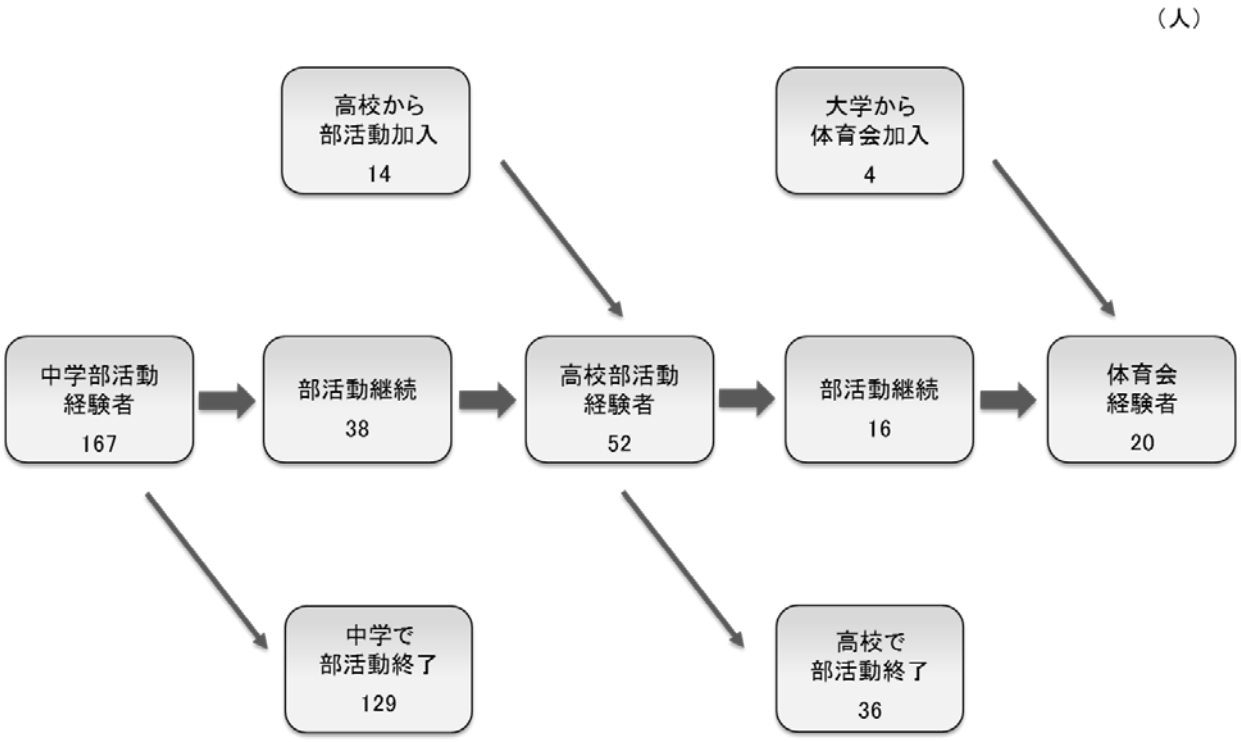
図 4 に、自身のオリンピック出場競技とは別に 1 競技を経験していた 153 人の実施時期を年代別に示した。実施時期の割合が高かったのは「13 歳未満」49.7%と「13～15 歳」47.7%であり、多くは少年期から何らかのスポーツに触れていたといえる。また、早い年代からの競技実施は、2 競技以上を実施していた者にも共通していた。1 競技を実施していた者のなかには、「13 歳未満」「13～15 歳」「16～18 歳」「19 歳以上」のいずれかの年代区分のみ実施して当該競技をやめたケースが大半であるが、「13 歳未満」から「13～15 歳」や「16～18 歳」まで同一競技を継続したり、「13 歳未満」で実施した後に「13～15 歳」は休止し、16 歳以上で再度同じ競技を実施したりする例もみられた。

図 4　オリンピック出場競技以外に 1 競技を実施した年代（複数回答）



次に、オリンピックに出場した競技以外の経験につき、各年齢期において実施した形態が「運動部活動・体育会」と回答した者の変遷をみた（図 5）。他競技の経験がある 264 人のなかで、中学校期に運動部活動に加入していたのは 167 人であった。このうち、22 人は同時期に複数の運動部活動を経験していた。中学校期で運動部活動を休止したのは 129 人で、残りの 38 人は高校期でも部活動を継続していた。このうち 15 人は中学校期とは異なる競技を実施した。高校期では、新たに部活動に加入した 14 人を合わせて 52 人が運動部活動を経験しており、うち 3 人は複数の運動部活動を実施した。大学体育会まで継続したのは 16 人で、うち 2 人は高校期とは異なる競技を実施した。大学で初めて体育会に加入した 2 人と、中学校期に運動部活動に加入し高校期は休止したが、大学から体育会に加入した 2 人（ともに中学校期とは別競技）を合わせて 20 人が大学体育会に所属した。これらの「運動部活動・体育会」経験者には、いずれかの年齢期においてオリンピック出場競技以外の競技で全国大会および国際大会に出場した実績をもつ者が 24 人いた。

図 5　中学・高校運動部活動および大学体育会でのオリンピック出場競技以外の競技経験（n=167）



以下、回答数が多かった夏季・冬季の上位 3 競技について、自身の出場競技と運動部活動や体育会で実施した他競技と出場した大会レベルをみた。「大会レベル」は、「1」市町村大会以下、「2」都道府県大会、「3」全国大会、「4」国際大会で、「－」は未回答である。

表 13　オリンピック出場競技と「運動部活動・体育会」実施競技（水泳，n=16）

出場競技	No.	中学 運動部活動	大会 レベル	高校 運動部活動	大会 レベル	大学 体育会	大会 レベル
水泳（n=16）	1	野球	1	体操	3	体操	1
	2	陸上競技	2	陸上競技	1		
	3	柔道	1				
		バドミントン	1				
		サッカー	1				
		体操	1				
	4	陸上競技	1				
		バレーボール	1				
	5	陸上競技	2				
	6	陸上競技	2				
	7	陸上競技	2				
	8	陸上競技	2				
	9	陸上競技	1				
	10	陸上競技	1				
	11	野球	1				
	12	野球	1				
	13	ソフトボール	1				
	14	テニス	2				
	15	バスケットボール	－				
	16	体操	－				

夏季競技のうち、最も回答数の多かった「水泳」16 人のうち、半数が「陸上競技」を経験していた。また、中学校期の運動部活動で 4 競技を実施した者もいる。

表 14　オリンピック出場競技と「運動部活動・体育会」実施競技（ボート，n=12）

出場競技	No.	中学 運動部活動	大会 レベル	高校 運動部活動	大会 レベル	大学 体育会	大会 レベル
ボート(n=12)	1	バスケットボール	2	バスケットボール	2		
		相撲	2				
		柔道	2				
	2	陸上競技	2	陸上競技	2		
		野球	1				
	3	バレーボール	2	水泳	2		
		水泳					
	4	野球	2	山岳	−		
	5			山岳	−		
	6			剣道	−		
	7	野球	1				
		バスケットボール	1				
	8	テニス	1				
		陸上競技	1				
	9	陸上競技	2				
		野球	1				
	10	バスケットボール	1				
	11	バスケットボール	1				
	12	バスケットボール	2				

「ボート」に出場した 12 人のうち、半数が中学校期の運動部活動で 2 つ以上の複数競技を経験していた。また、大学体育会への加入者はいなかった。

表 15　オリンピック出場競技と「運動部活動・体育会」実施競技（バレーボール，n=11）

出場競技	No.	中学 運動部活動	大会 レベル	高校 運動部活動	大会 レベル	大学 体育会	大会 レベル
バレーボール(n=11)	1	陸上競技	2				
		野球	1				
	2	水泳	1				
		陸上競技	3				
	3	バスケットボール	1				
		陸上競技	1				
	4	陸上競技	2				
	5	陸上競技	1				
	6	陸上競技	1				
	7	バスケットボール	1				
	8	バスケットボール	1				
	9	水泳	1				
	10	卓球	1				
	11	陸上競技	−				

「バレーボール」に出場した 11 人のうち、中学校期の運動部活動で球技を経験したのは 5 人であった。高校期以降に運動部活動等で他の競技を実施した者はいない。

表 16　オリンピック出場競技と「運動部活動・体育会」実施競技（スキー，n=17）

出場競技	No.	中学 運動部活動	大会 レベル	高校 運動部活動	大会 レベル	大学 体育会	大会 レベル
スキー(n=17)	1	体操	－	体操	－	体操	－
	2			陸上競技	1	陸上競技	1
	3	陸上競技	3	陸上競技	3		
	4	陸上競技	2	陸上競技	2		
	5	野球	2	野球	2		
	6	バスケットボール	1	テニス	1		
	7			陸上競技	3		
	8	陸上競技	2				
		バレーボール	1				
	9	陸上競技	3				
	10	陸上競技	2				
	11	陸上競技	2				
	12	陸上競技	1				
	13	陸上競技	1				
	14	陸上競技	1				
	15	野球	1				
	16	バスケットボール	1				
	17	水泳	1				

冬季競技で最も回答数の多かった「スキー」17 人のうち、11 人が「陸上競技」を経験し、全国大会へ出場した者もいた。

表 17　オリンピック出場競技と「運動部活動・体育会」実施競技（アイスホッケー，n=9）

出場競技	No.	中学 運動部活動	大会 レベル	高校 運動部活動	大会 レベル	大学 体育会	大会 レベル
アイスホッケー(n=9)	1	ソフトボール	1	ソフトボール	1		
	2	野球	1				
		サッカー	1				
	3	陸上競技	2				
	4	バレーボール	2				
	5	野球	1				
	6	バレーボール	1				
	7	バドミントン	1				
	8	バスケットボール	1				
	9	バスケットボール	1				

「アイスホッケー」に出場した 9 人のうち、8 人がチームスポーツを経験していた。

表 18　オリンピック出場競技と「運動部活動・体育会」実施競技（ボブスレー，n=8）

出場競技	No.	中学 運動部活動	大会 レベル	高校 運動部活動	大会 レベル	大学 体育会	大会 レベル
ボブスレー(n=8)	1	陸上競技	4	陸上競技	4	陸上競技	4
		ソフトボール	1				
	2	陸上競技	4	陸上競技	4	陸上競技	4
	3	陸上競技	4	陸上競技	4	陸上競技	4
	4	陸上競技	3	陸上競技	3	陸上競技	3
	5	陸上競技	3	陸上競技	3	陸上競技	3
	6	陸上競技	3	陸上競技	3	陸上競技	3
	7			陸上競技	3	陸上競技	3
	8	陸上競技	2				

「ボブスレー」に出場した 8 人は全員が陸上経験者で、1 人を除き大学体育会まで継続していた。また、そのほとんどが全国大会以上の高い競技実績をもっていた。

２−３　競技の開始と継続の要因

オリンピアンが競技を始めた要因を、「最もあてはまる」から「最もあてはまらない」までの 5 段階評価でたずねた。調査項目ごとに回答数は異なるものの、最も回答数の多かった「当該競技への興味」に「最もあてはまる」と回答したオリンピアンは 42.4%にのぼった（図 6）。以下、「最もあてはまる」の割合が高かったのは、「身体活動が好きだから」（37.0%）、「教員・指導者からのすすめ」（25.6%）、「勝負が好きだから」（25.4%）と続く。ただし、「最もあてはまる；5」と「あてはまる；4」の二つを加えると、「身体活動が好きだから」（59.0%）、「当該競技への興味」（56.1%）、「勝負が好きだから」（42.6%）の順になり、本人の内発的なモチベーションに関わるものが競技を開始した要因の上位を占めた。一方、「最もあてはまらない」の割合が高かったのは、「兄弟・姉妹からの誘い」（78.4%）、「友人からの誘い」（61.2%）、「親の影響・親のすすめ」（60.4%）、「教員・指導者からのすすめ」（51.4%）と他者からの勧誘を要因とする項目においていずれも半数を超えた。

図 6　オリンピック出場競技を開始した要因（複数回答）

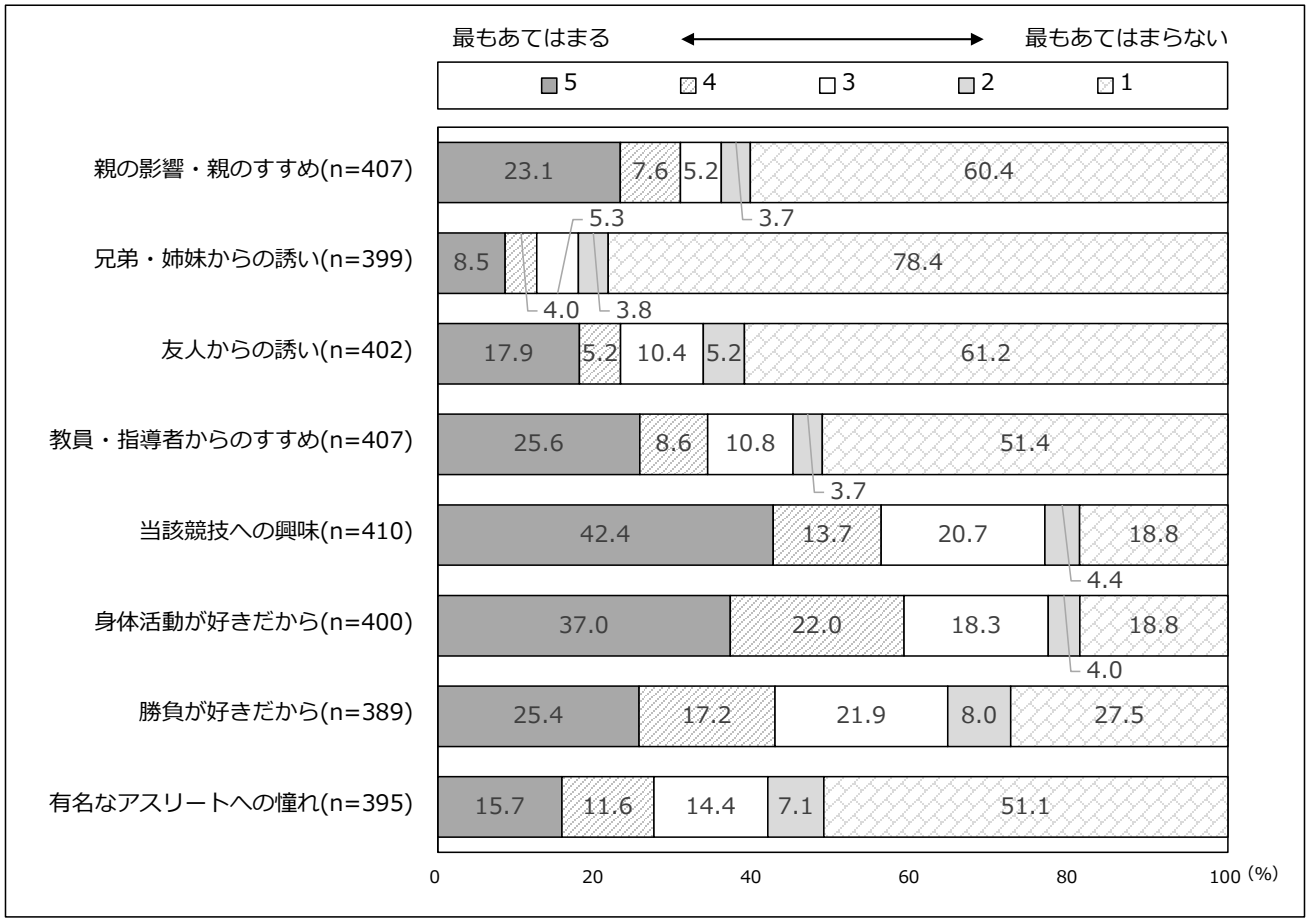


表 19 に、競技を始めた要因を性別に示した。「最もあてはまる」と回答した男性で最も高かったのは「当該競技への興味」45.6%で、以下、「身体活動が好きだから」37.4%、「勝負が好きだから」29.1%、「教員・指導者からのすすめ」24.3%と続く。女性では、「身体活動が好きだから」36.2%が最も高く、次いで「当該競技への興味」35.4%であった。性差が大きかった要因をみると、「最もあてはまる」では「親の影響・親のすすめ」で男性 19.6%に対して女性 31.0%と大幅に女性が上回った。その他に 10 ポイント以上の差がみられたのは、「当該競技への興味」と「勝負が好きだから」で、どちらも男性が上回った。一方、「最もあてはまらない」では、「有名なアスリートへの憧れ」で、男性 45.4%、女性 63.9%と最も大きな差がみられた。

表 19　オリンピック出場競技を開始した要因（性別、複数回答）　（%）

		あてはまる ←→				あてはまらない
		5	4	3	2	1
親の影響・親のすすめ	男性(n=281)	19.6	6.8	4.6	3.6	65.5
	女性(n=126)	31.0	9.5	6.3	4.0	49.2
兄弟・姉妹からの誘い	男性(n=275)	8.7	4.7	5.1	4.0	77.5
	女性(n=124)	8.1	2.4	5.6	3.2	80.6
友人からの誘い	男性(n=279)	19.4	5.7	11.5	5.7	57.7
	女性(n=123)	14.6	4.1	8.1	4.1	69.1
教員・指導者からのすすめ	男性(n=280)	24.3	8.6	11.8	4.6	50.7
	女性(n=127)	28.3	8.7	8.7	1.6	52.8
当該競技への興味	男性(n=283)	45.6	14.1	19.1	3.9	17.3
	女性(n=127)	35.4	12.6	24.4	5.5	22.0
身体活動が好きだから	男性(n=273)	37.4	24.9	19.8	2.2	15.8
	女性(n=127)	36.2	15.7	15.0	7.9	25.2
勝負が好きだから	男性(n=268)	29.1	19.0	23.5	6.3	22.0
	女性(n=121)	17.4	13.2	18.2	11.6	39.7
有名なアスリートへの憧れ	男性(n=273)	17.9	13.2	17.2	6.2	45.4
	女性(n=122)	10.7	8.2	8.2	9.0	63.9

次に、オリンピアンが競技を継続した要因を、「最もあてはまる」から「最もあてはまらない」までの 5 段階評価でたずねた。「最もあてはまる；5」をみると、74.8%の「記録・競技会への挑戦と目標達成」74.8%が最も高く、以下「競技技術や身体能力の向上」(56.7%)、「競技が楽しい」(51.8%)、「勝負が好き」(38.3%)、「周囲の期待にこたえたい」(38.0%) と続いた（図 7)。一方、「最もあてはまらない；1」をみると、「収入が得られる」が 71.5%と他の項目を大きく引き離し、次いで「名声をあげたい」が 24.4%だった。これをみると心理的に外発的報酬と呼ばれる「収入が得られる」や「名声をあげたい」は、モチベーション傾向が低いことがうかがえる。

図 7　オリンピック出場競技を継続した要因（複数回答）

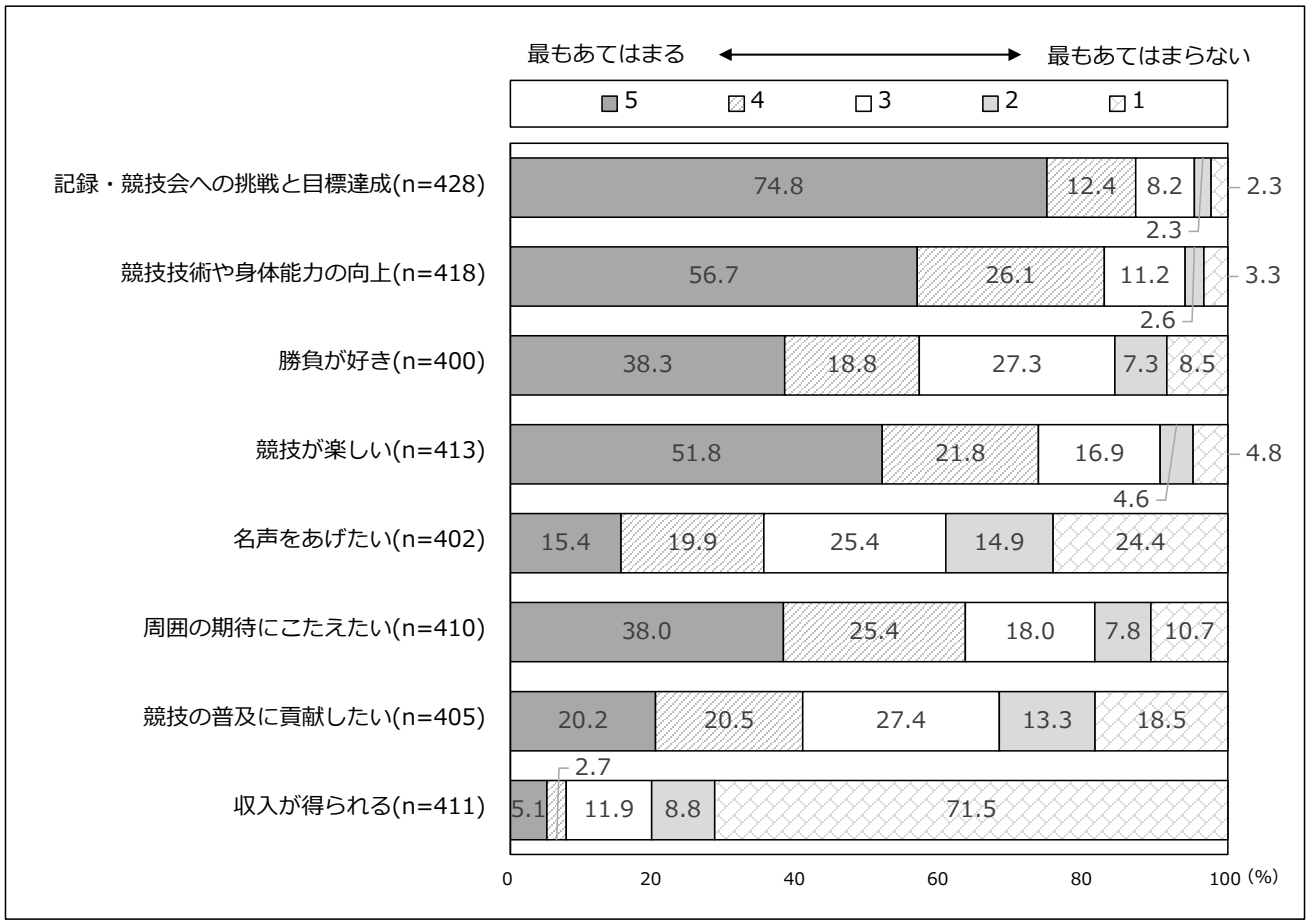


表 20 に、競技を継続した要因を性別に示した。「最もあてはまる」と回答した男性で最も高かったのは「記録・競技会への挑戦と目標達成」74.3%で、以下、「競技技術や身体能力の向上」56.1%、「競技が楽しい」51.6%、「勝負が好き」40.4%と続く。女性でも、上位の要因においては男性とほぼ変わりなく、性差もあまりみられない。一方、「最もあてはまらない」では、「収入が得られる」が男女とも約 7 割にのぼった。性差が大きかった要因をみると、「最もあてはまる」では「名声をあげたい」において、男性が 19.3%に対して女性が 7.1%と 2 倍以上も上回り、「最もあてはまらない」では「名声をあげたい」で女性が 10 ポイント以上の差がみられた。

表 20　オリンピック出場競技を継続した要因（性別、複数回答）

（%）

		あてはまる ◀——▶ あてはまらない				
		5	4	3	2	1
記録・競技会への挑戦と目標達成	男性(n=296)	74.3	11.8	8.8	2.7	2.4
	女性(n=132)	75.8	13.6	6.8	1.5	2.3
競技技術や身体能力の向上	男性(n=287)	56.1	27.2	11.5	2.4	2.8
	女性(n=131)	58.0	23.7	10.7	3.1	4.6
勝負が好き	男性(n=275)	40.4	21.5	25.5	6.2	6.5
	女性(n=125)	33.6	12.8	31.2	9.6	12.8
競技が楽しい	男性(n=285)	51.6	21.1	18.9	4.6	3.9
	女性(n=128)	52.3	23.4	12.5	4.7	7.0
名声をあげたい	男性(n=275)	19.3	21.5	24.7	13.5	21.1
	女性(n=127)	7.1	16.5	26.8	18.1	31.5
周囲の期待にこたえたい	男性(n=282)	37.2	27.7	16.0	8.5	10.6
	女性(n=128)	39.8	20.3	22.7	6.3	10.9
競技の普及に貢献したい	男性(n=278)	19.8	21.6	29.1	12.9	16.5
	女性(n=127)	21.3	18.1	23.6	14.2	22.8
収入が得られる	男性(n=284)	5.3	2.1	13.0	7.0	72.5
	女性(n=127)	4.7	3.9	9.4	12.6	69.3

３．競技を継続するための経費

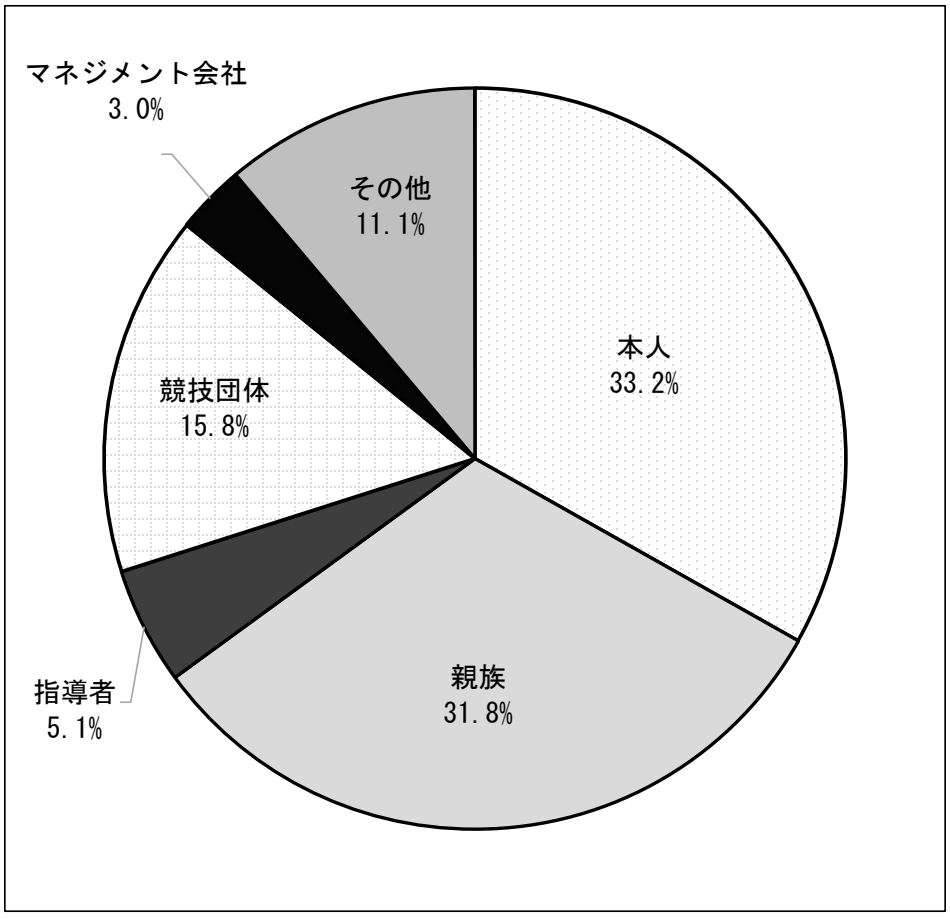
３−１　競技にかかる経費の管理

本調査ではオリンピアンが現役時に競技を継続するための経費についてたずねた。

まず、競技にかかる経費の主たる管理者をみると、回答を得た 431 人のうち、「本人」が 33.2%と最も多く、競技を続けながら経費を自己管理していたことがわかる（図 8）。次いで「親族」（31.8%）の割合が高く、競技を継続するうえで親族から側面的なサポートを得ていたといえる。以下、「競技団体」（15.8%）、「指導者」（5.1%）、「マネジメント会社」（3.0%）の順であった。全体の 1 割にのぼる「その他」には、所属する企業が管理していたと考えられる。

また、「本人」と「親族」の回答者を年代別にみると、「本人」は 60 代が 50.3%と半数にのぼり、以下、30 代（16.8%）、50 代（16.1%）、40 代（13.3%）、20 代（3.5%）と続く。10 代の回答はなかった。「親族」でも 60 代が 42.3%で最も多く、以下、40 代（21.9%）、50 代（14.6%）、30 代（13.1%）、20 代（5.8%）、10 代（2.2%）と続く。「競技団体」と回答したのは、夏季競技ではバレーボール、ボート、水泳など 18 競技、冬季競技ではバイアスロン、アイスホッケー、カーリング、スキーの 4 競技への出場者であった。

図 8　競技にかかる経費の管理者（n＝431）



3－2　夏季・冬季大会別にみる競技を継続するための経費の自己負担額

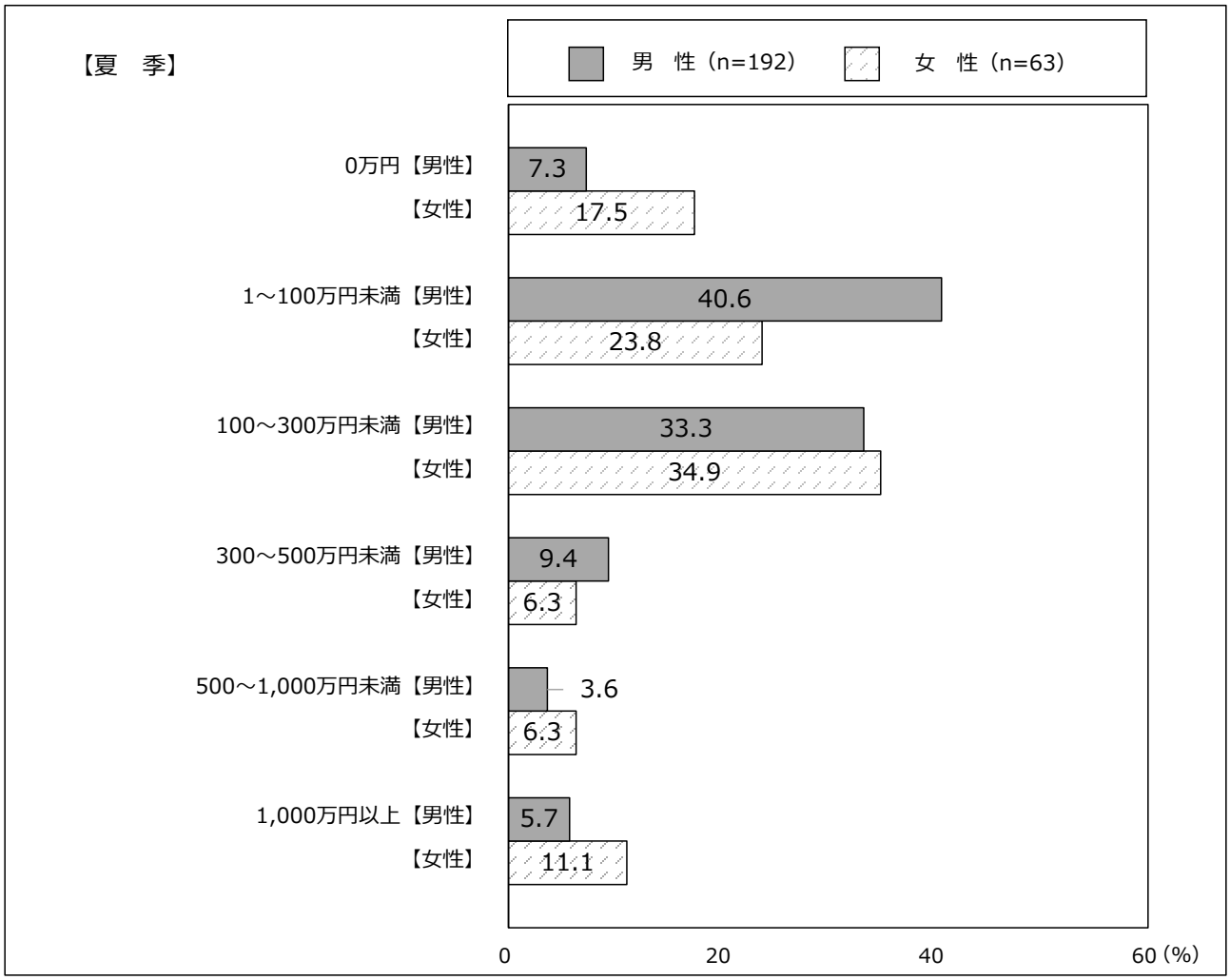
表 21 に、競技を継続するための年間経費を夏季と冬季の大会別に示した。オリンピックへの出場を目指す競技活動は、複数年に渡り継続する。ここでは、対象とする年度に一定の統一性をもたせるため、オリンピックに出場した前年度に個人で負担した経費の総額を対象とした。なお、オリンピックへ複数回の出場経験がある場合は、最後に出場したオリンピックの前年度の経費をたずねた。夏季・冬季の両大会出場 1 人を除き、回答を得た 325 人のうち、夏季大会への出場者では、平均額が男性で 206.2 万円、女性で 250.7 万円と女性が男性を上回った。最高額は男性の 4,500 万円（馬術）であった。冬季大会への出場者では、平均額が男性で 245.4 万円、女性で 460.9 万円と、女性が男性を 2 倍近く上回ったが、最高額は男女とも 3,000 万円だった。経費の高い順に競技をみると、前述の馬術に続き、スキー、スケート、セーリング、自転車、ウェイトリフティングで 1,000 万円を超える自己負担額があった。

表 21　夏季・冬季大会別の年間経費の自己負担額（n＝325）　（万円）

		平均金額	最高額	最少額
夏季	男性(n=191)	206.2	4,500	0
	女性(n=63)	250.7	1,500	0
冬季	男性(n=48)	245.4	3,000	0
	女性(n=23)	460.9	3,000	0

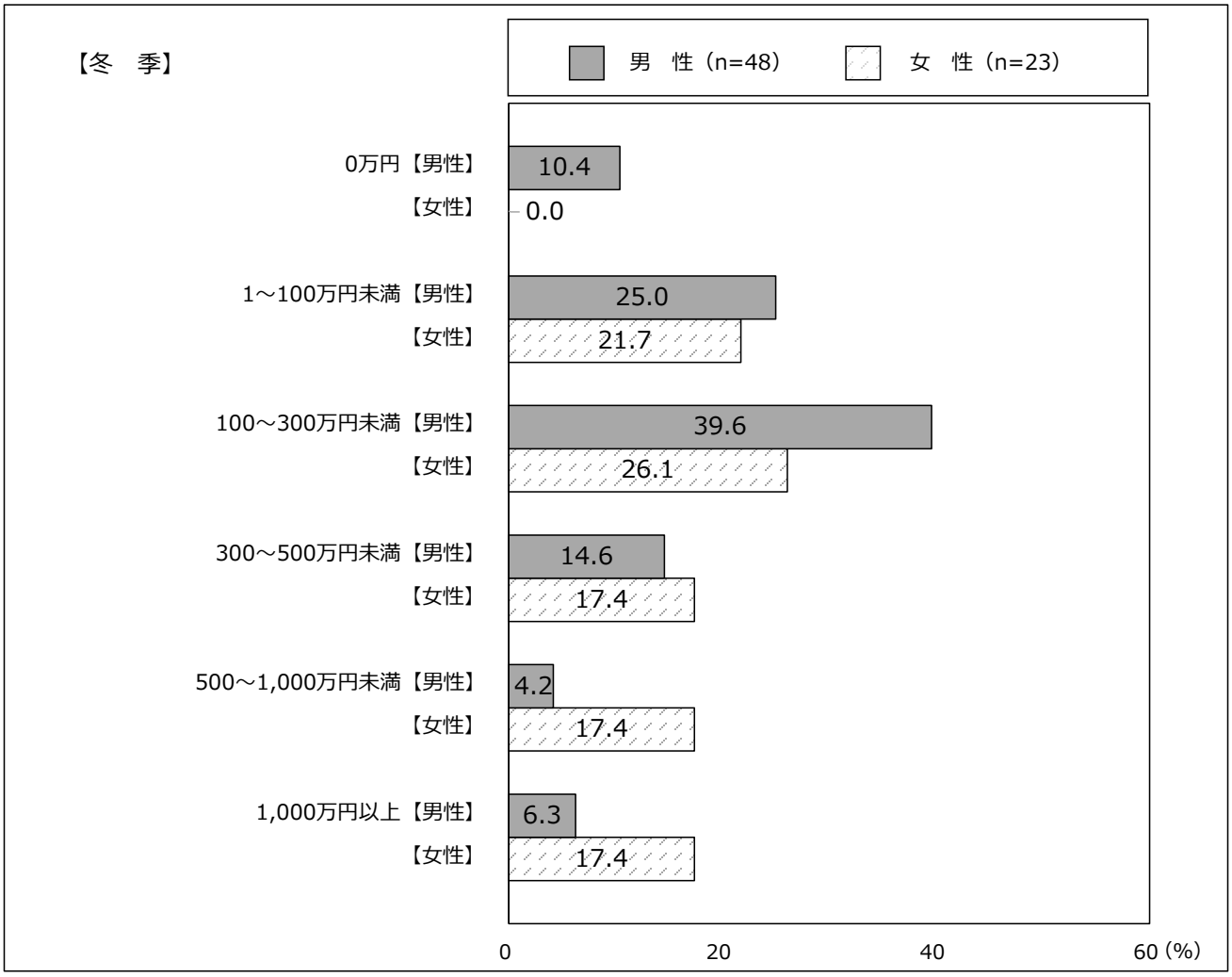
次に、夏季大会の出場者が個人で負担した経費の分布を示した（図 9）。男性では、「1～100 万円未満」の自己負担額が 40.6%と最も多く、「100～300 万円未満」（33.3%）と合わせると 7 割を超える。女性では、「100～300 万円未満」（34.9%）と「1～100 万円未満」（23.8%）でほぼ半数であった。夏季大会出場の女性にみられる特徴として、男性の 2 倍強の約 2 割で自己負担がなかった一方、約 1 割で「1,000 万円以上」の自己負担があった点があげられる。

図 9　夏季大会出場者の個人負担額の分布（n＝255）



同様に、冬季大会の出場者が個人で負担した経費の分布を示した（図 10）。男性では、「100～300 万円未満」（39.6%）の自己負担額が最も多く、「1～100 万円未満」（25.0%）と合わせると 6 割を超える。男性と同じく、女性でも「100～300 万円未満」の自己負担が 26.1%と最も多かった。冬季大会出場の女性では自己負担がなかったオリンピアンはいなく、半数以上が 300 万円以上の自己負担を要した。用具の使用や施設利用などの冬季競技の特性上、高額な自己負担を要したと考えられる。

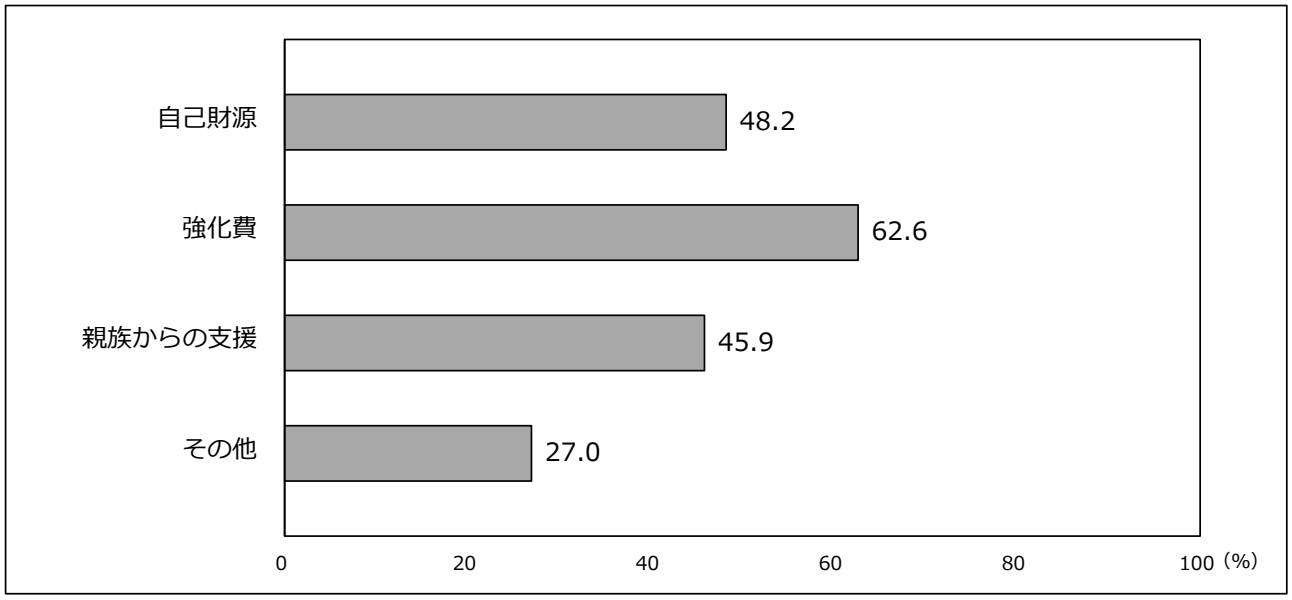
図 10　冬季大会出場者の個人負担額の分布（n＝71）



3－3　競技にかかる経費の収入割合と強化費

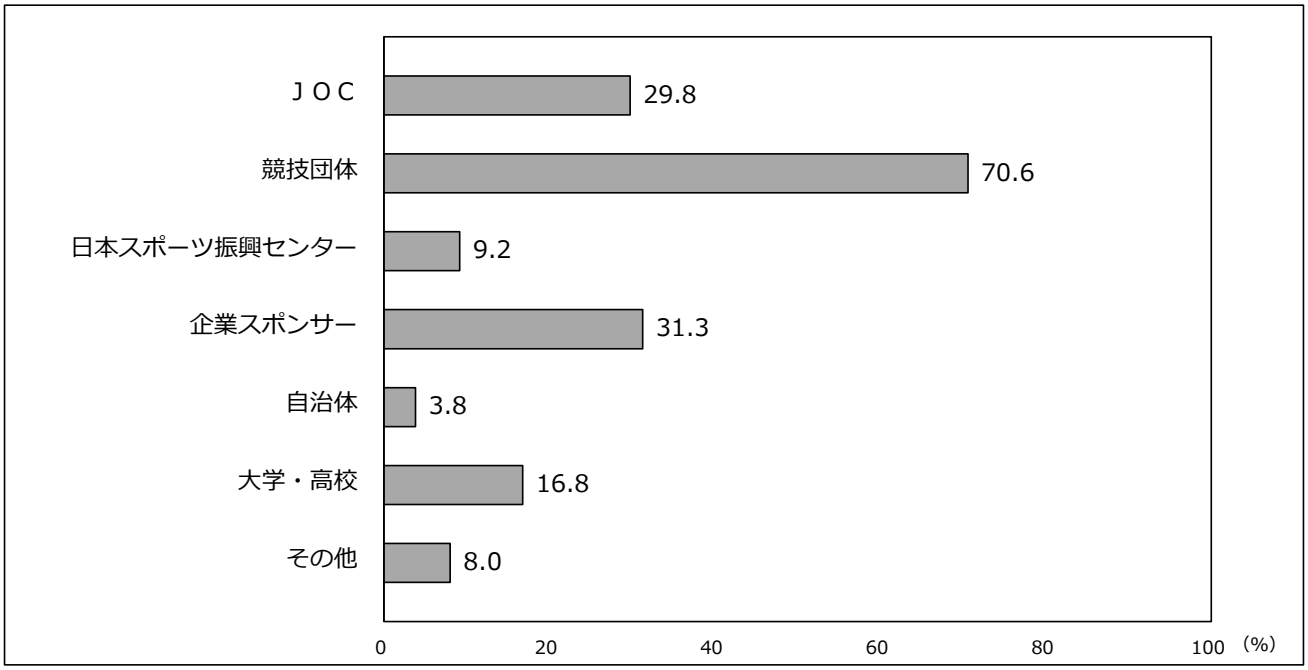
図 11 に、オリンピアンが競技を続けるうえで必要な経費の収入割合を示した。回答を得た 423 人のうち、「強化費」の支給による収入が 62.6%と最も高く、次いで「自己財源」48.2%、「親族からの支援」45.9%となった。競技団体等からの強化費の受給以外に、自ら不足分の財源を得たり、親族からのサポートを受けたりして強化活動に充てていることがわかる。

図 11　競技にかかる経費の収入割合（複数回答）



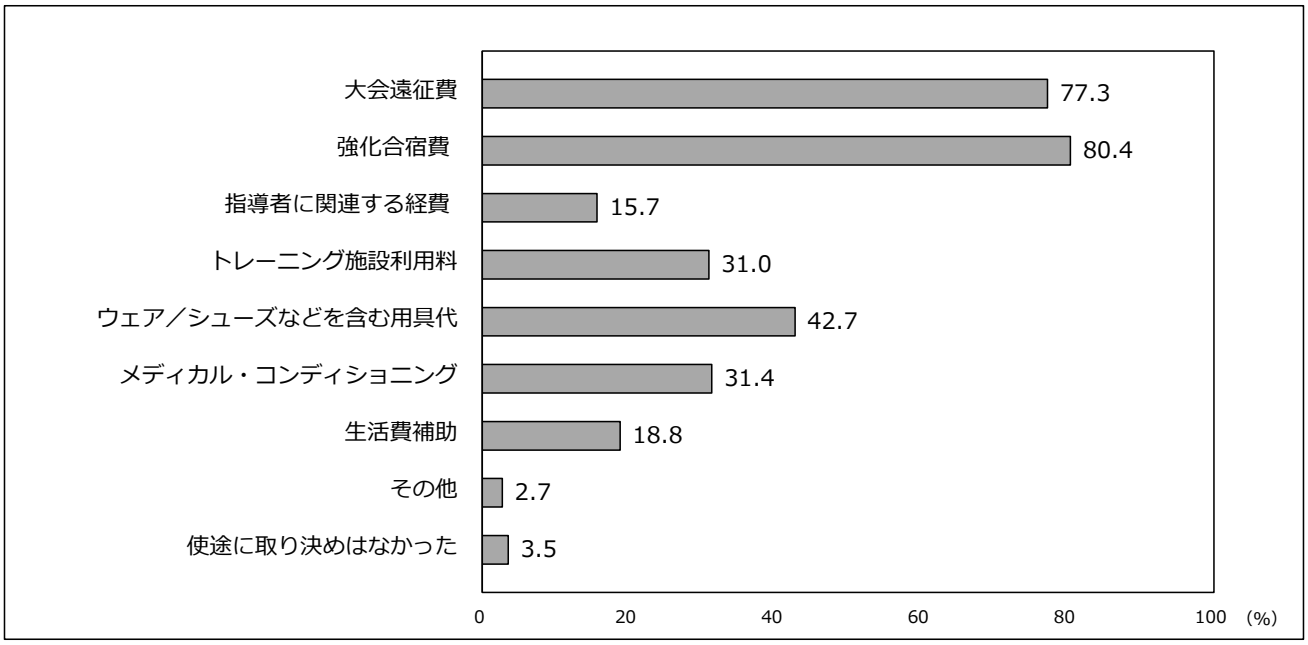
収入割合の最も大きかった「強化費」につき、その支給元の団体の割合をみた（図 12）。前項で「強化費」と回答し、強化費の支給元にも回答した 262 人のうち、「競技団体」が 70.6%と最も高く、以下、「企業スポンサー」31.3%、「JOC」29.8%、「大学・高校」16.8%などと続く。JOC から強化事業委託費を受けた各競技団体は、大会の成績などに応じた独自の指標により指定した強化選手へ強化費を支給している。現役時に所属した企業をはじめとしたスポンサーや、大学・高校からの支援も比較的高い割合を示した。

図 12　強化費の支給元組織（複数回答）



次に強化費の使途をたずねたところ、「強化合宿費」（80.4%）と「大会遠征費」（77.3%）が他の項目を大きく上回っていた（図 13）。国外を含む遠方での合宿や大会など、強化活動を実施するうえで必要な旅費に類する支出に強化費を充当していたことがわかる。以下、「ウェア／シューズなどを含む用具代」（42.7%）、「メディカル・コンディショニング」（31.4%）、「トレーニング施設利用料」（31.0%）と続き、自身の競技環境の整備に関する費用の項目が並んだ。

図 13　強化費の使途（複数回答）



４．引退後のキャリア

４－１　引退年齢

ここでは、オリンピアンの引退年齢をたずねた。回答を得た 432 人のうち、全体の引退平均年齢は 29.9 歳で、男性の平均は 31.1 歳、女性の平均は 26.9 歳であった（表 22）。オリンピックに出場した競技の開始（p.11）と同じように、引退の年齢も男性より女性の方が若かった。最年少は男女とも 18 歳で、最年長は男性が 70 歳、女性が 54 歳であった。18 歳で引退した競技は「自転車」、「体操」、「水泳」、「スケート」と複数の回答があり、一方の最年長者は「サッカー」1 競技で、シニア部門の大会まで現役を継続したと考えられる。

表 22　オリンピアンの引退年齢（n＝432）　（歳）

	平均年齢	最年長	最年少
全体(n=432)	29.9	70	18
男性(n=308)	31.1	70	18
女性(n=124)	26.9	54	18

表 23 に、夏季と冬季大会別の出場者の引退年齢を示した。男性の引退年齢は、夏季大会で 31.5 歳、冬季大会で 29.6 歳であり、女性はそれぞれ 26.8 歳、27.4 歳であった。

表 23　夏季・冬季大会別のオリンピアンの引退年齢（n＝432）　（歳）

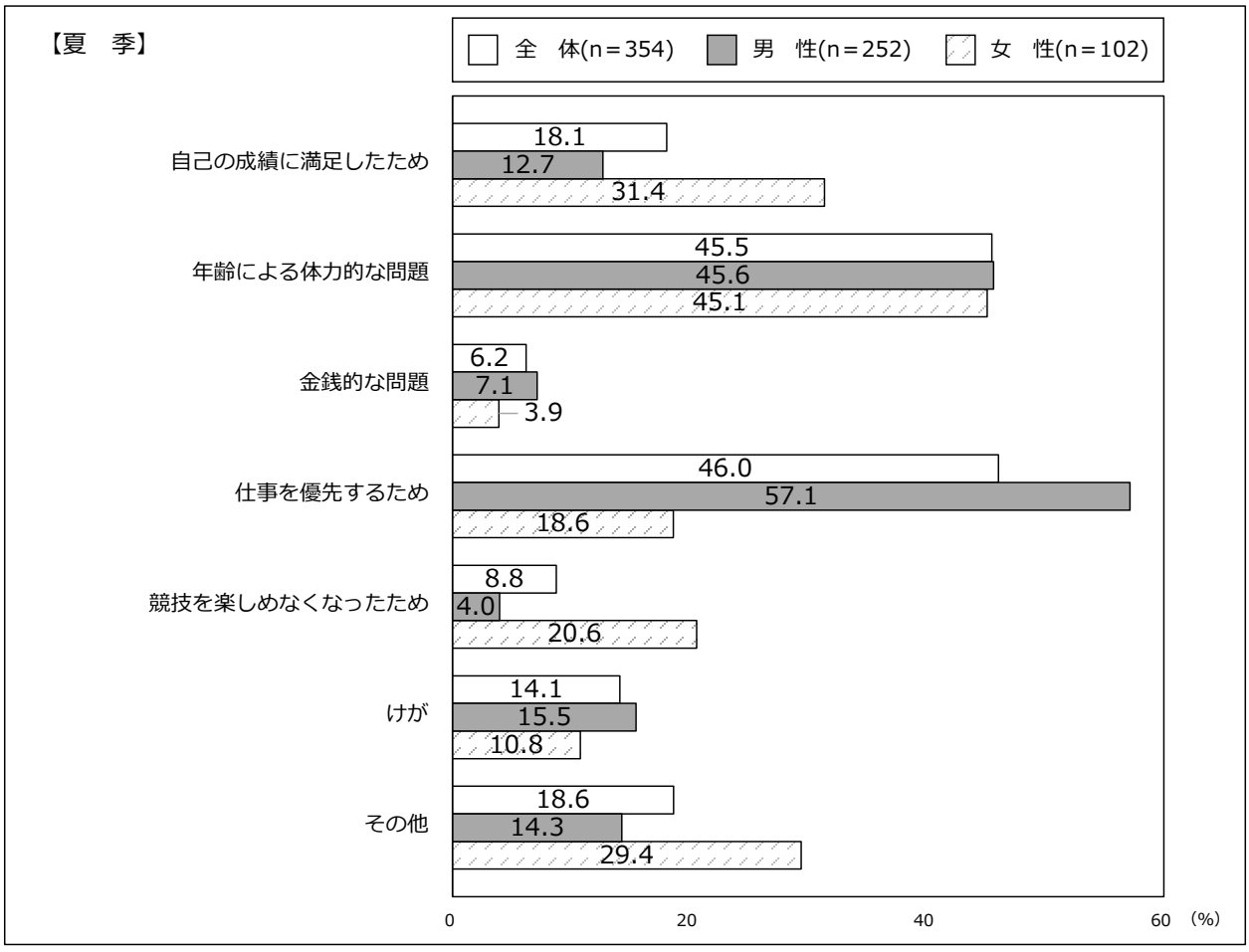
		平均年齢	最年長	最年少
夏季	男性(n=253)	31.5	70	18
	女性(n=101)	26.8	54	18
冬季	男性(n=54)	29.6	50	22
	女性(n=23)	27.4	34	18

※夏季・冬季の両大会に出場した 1 名の回答は含まない。

４－２　引退の理由

図 14 に、夏季大会への出場経験をもつオリンピアンの引退理由を示した。全体で最も割合の高い回答は「仕事を優先するため」（46.0%）で、以下、「年齢による体力的な問題」（45.5%）、「その他」（18.6%）、「自己の成績に満足したため」（18.1%）、「けが」（14.1%）、「競技を楽しめなくなったため」（8.8%）、「金銭的な問題」（6.2%）と続く。ただし、「仕事を優先するため」では、男性の 57.1%に対し女性が 18.6%と大きな差があり、男性の割合が全体を引き上げたことがわかる。相対的に高い割合を示したのは「年齢による体力的な問題」で、男女とも約半数が引退理由に挙げた。一方、女性の引退理由で男性を大幅に上回った項目は、「自己の成績に満足したため」や「競技を楽しめなくなったため」といったいわゆる競技に対する完全燃焼感、あるいは成績の不振等から起こる心理的な要因がみられる。

図 14　夏季大会出場オリンピアンの引退理由（n=354、複数回答）



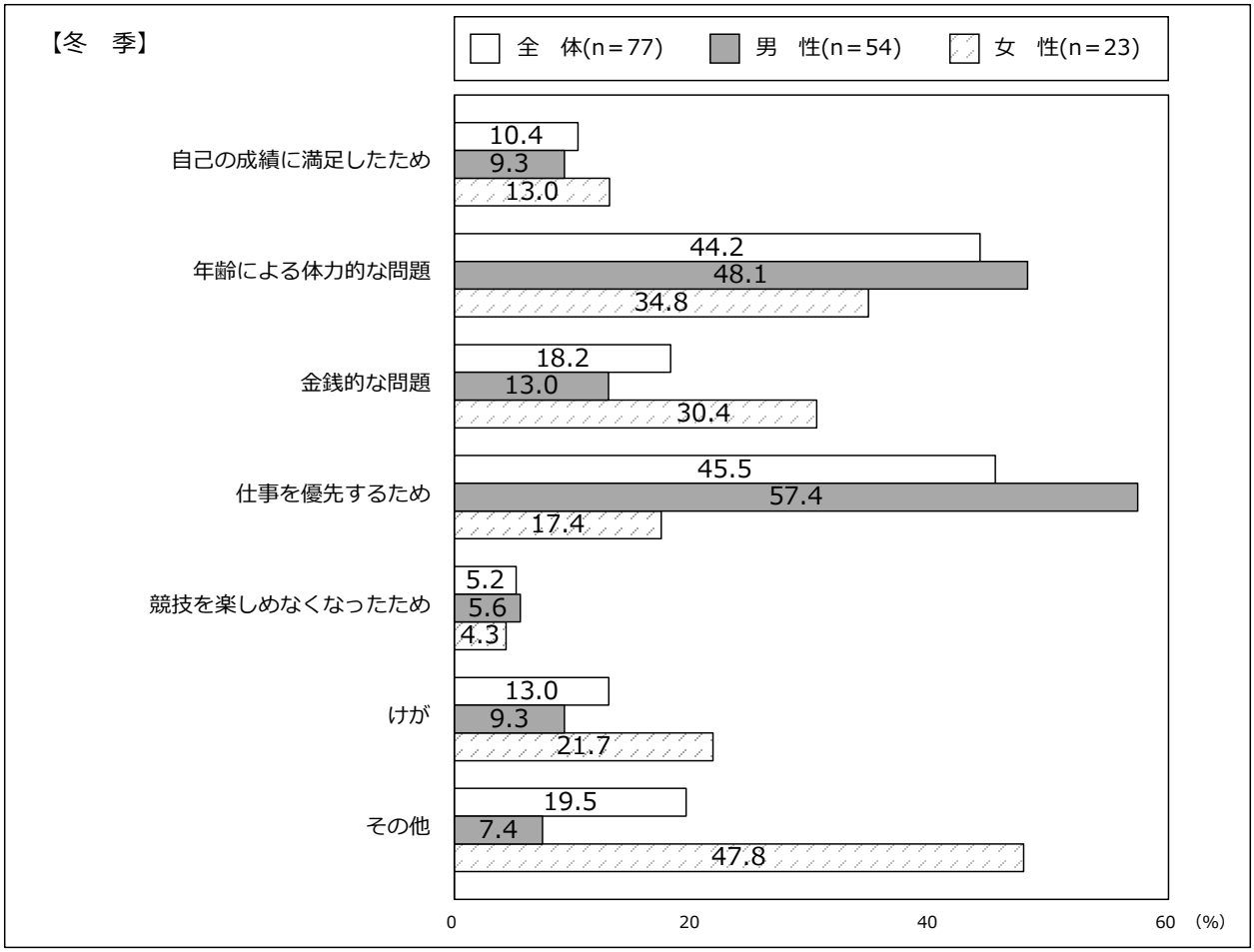
※夏季・冬季の両大会に出場した１名の回答は含まない。

図 15 に、冬季大会への出場経験をもつオリンピアンの引退理由を示した。全体で最も割合の高い回答は「仕事を優先するため」（45.5%）で、以下、「年齢による体力的な問題」（44.2%）、「その他」（19.5%）、「金銭的な問題」（18.2%）、「けが」（13.0%）、「自己の成績に満足したため」（10.4%）、「競技を楽しめなくなったため」（5.2%）と続く。夏季大会と同じく、「仕事を優先するため」では、男性の 57.4%に対し女性が 17.4%であり、男性の割合が全体を大きく引き上げた。また、全体の上位 3 項目は夏季大会と変わらないものの、夏季大会では最も低い割合を示した「金銭的な問題」が、冬季大会の引退理由としては比較的に高い割合を示した。冬季競技特有の用具の調達と維持、競技施設への遠征費や施設利用にかかる経費が負担になったことが考えられる。

夏季大会と冬季大会ともに女性の割合が多い「その他」の自由記述には、「結婚、出産、育児」「指導者転向、後進育成」「所属チームの廃部」「スポンサー契約の継続が出来なかったため」「他のことをしたかった」「進学したかったため」などの回答があった。

この結果を概観すると、「競技はまだ楽しく」、「自己の成績にも満足していないが」、「体力的な限界を感じる」と同時に、年齢的に「仕事を優先せざるを得なくなった」ことで引退したという心理的状況の可能性がうかがえる。

図 15　冬季大会出場オリンピアンの引退理由（n=77、複数回答）

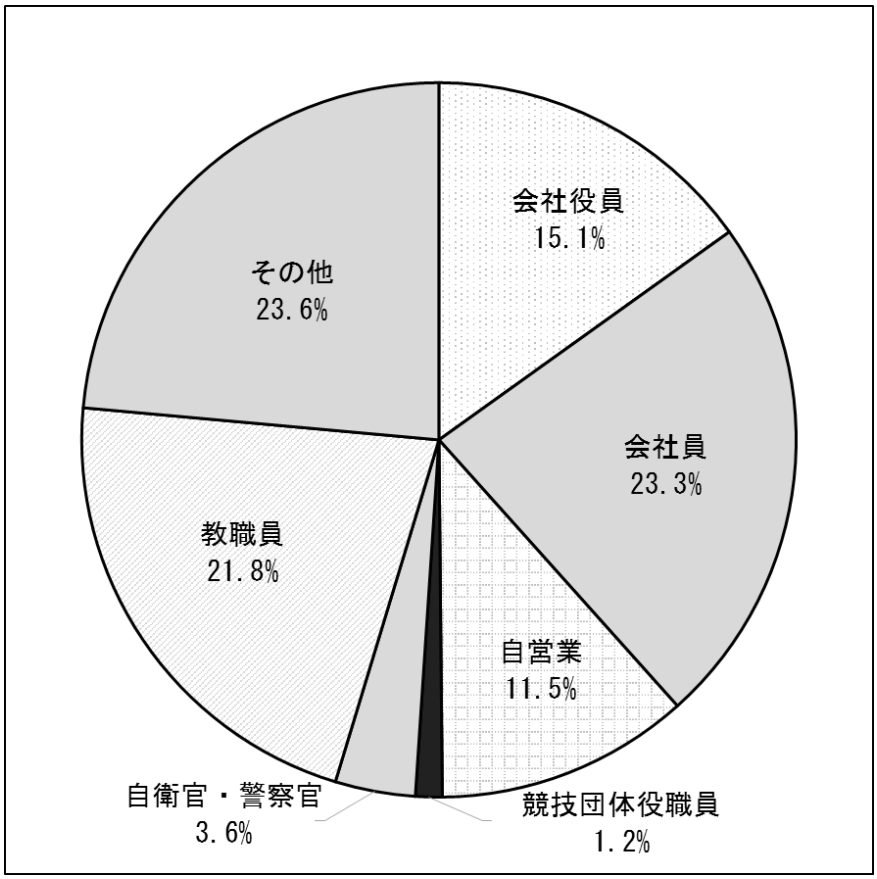


※夏季・冬季の両大会に出場した 1 名の回答は含まない。

４－３　現在の職業と雇用形態

オリンピアンが現在、生計を立てる給与を受ける職業をたずね、図 16 に示した。回答を得た 331 人のうち、「会社員」が 23.3%で最も多く、次いで、「教職員」（21.8%）、「会社役員」（15.1%）、「自営業」（11.5%）、「自衛官・警察官」（3.6%）、「競技団体役職員」が 1.2%の順であった。

図 16　オリンピアンの現在の職業（n＝331）



このうち、「会社役員」「会社員」「自営業」を対象に、現在の勤務先の業種をたずねた。回答を得た 158 人のうち、全体で最も多いのは、「サービス業」（29.1%）で、以下、「製造業」（13.9%）、「その他」（12.0%）、「卸・小売業」（10.8%）だった（表 24）。

男女別にみると、最も多いのは「サービス業」で男性が 27.6%、女性が 34.3%で同じ業種であった。次に男性で多かった業種は「製造業」（17.9%）で、女性は「金融・保険業」（14.3%）であった。

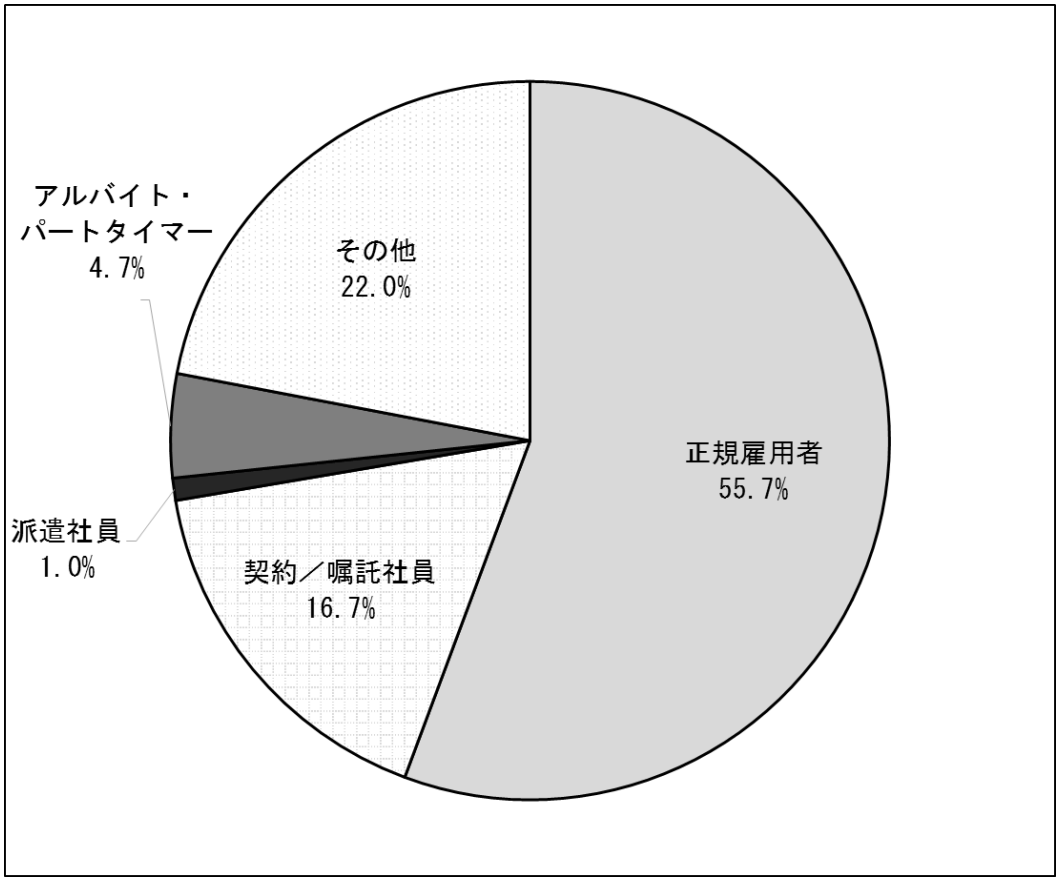
表 24　オリンピアンの現在の勤務先（n＝158）　（%）

	全体(n=158)	男性(n=123)	女性(n=35)
農林漁業	0.0	0.0	0.0
鉱業	0.0	0.0	0.0
建設業	5.7	7.3	0.0
製造業	13.9	17.9	0.0
運輸業	3.2	2.4	5.7
電気・ガス・熱供給・水道業	1.3	1.6	0.0
情報通信業	1.9	1.6	2.9
卸売・小売業	10.8	12.2	5.7
金融・保険業	8.9	7.3	14.3
不動産業	3.2	4.1	0.0
飲食店・宿泊業	3.2	3.3	2.9
医療・福祉	5.7	5.7	5.7
教育・学習支援業	1.3	0.8	2.9
サービス業	29.1	27.6	34.3
その他	12.0	8.1	25.7

※職業を回答したオリンピアンのうち、「会社役員」「会社員」「自営業」を選択した回答者を対象に分類

オリンピアンの現在の勤務先での雇用形態をみると、「正規雇用者」55.7%、「契約／嘱託社員」16.7%、「アルバイト・パートタイマー」4.7%、「派遣社員」1.0%となった（図 17）。

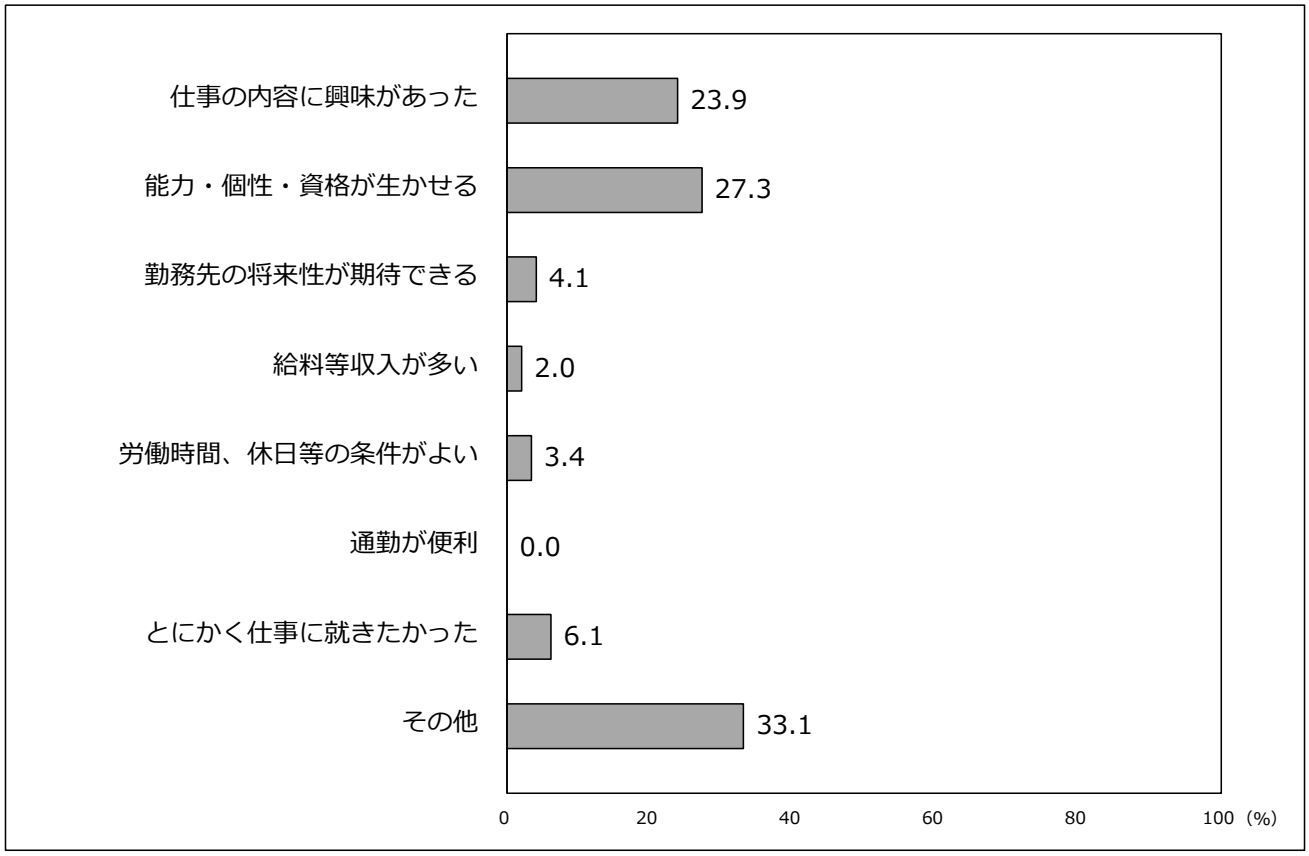
図 17　オリンピアンの現在の勤務先の雇用形態（n＝300）



４−４　現在の職業の選定理由

オリンピアンが現在の勤務先を選んだ理由についてたずねた。回答を得た 293 人のうち、「能力・個性・資格が生かせる」が 27.3%で最も多く、次いで、「仕事の内容に興味があった」（23.9%）、「とにかく仕事に就きたかった」（6.1%）と続く（図 18）。「その他」の記述回答には、「会社にチームがあった」「競技に携わることができるから」「スカウト」や「推薦を受けて」といった企業チームに所属することで継続的に競技に関われる環境が影響していると解釈できるものがあった。

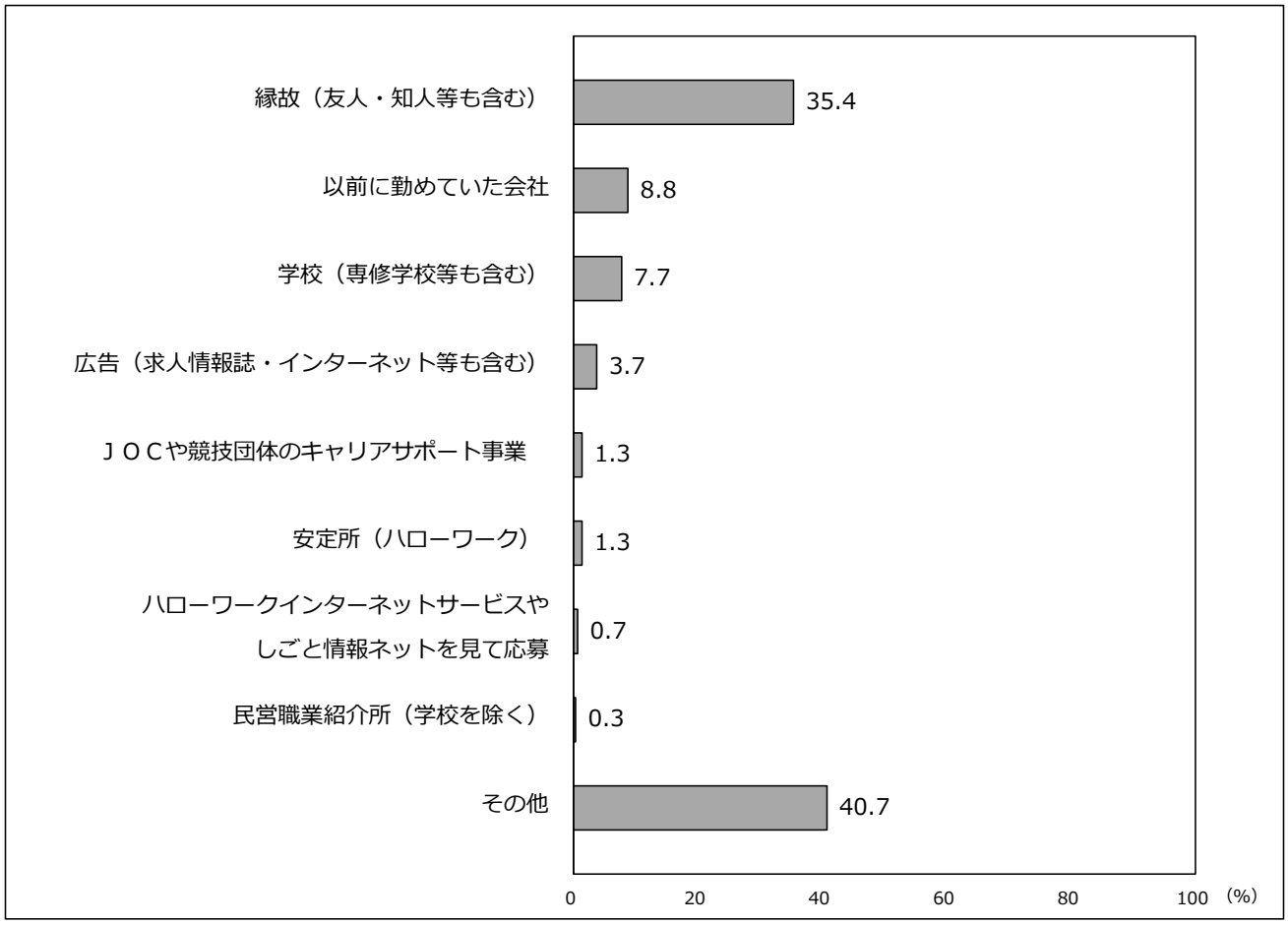
図 18　オリンピアンの現在の勤務先選定理由（n＝293）



４－５　現在の職業への入職経路

オリンピアンの現在の職業への入職経路（あっせん機関等）をみると、「縁故（友人・知人等も含む）」が 35.4%と最も多く、「以前に勤めていた会社」（8.8%）、「学校（専修学校等も含む）」（7.7%）、「広告（求人情報誌・インターネット等も含む）」（3.7%）などを大きく引き離している（図 19）。「その他」に多くみられた回答は、「起業・自営」や「自身の就職活動」のほか、選定理由（p.37）と同じく「スカウト」や「推薦を受けて」があった。

図 19　オリンピアンの現在の勤務先への入職経路（n＝297）



４−６　現在の年収

現在のおおよその年収をみると、全体で最も多い年収層は、「300 万円未満」の 19.1%で、以下、「300 万～450 万円未満」（14.4%）、「450 万～600 万円未満」（14.1%）、「1,200 万円以上」（13.0%）であった（表 25）。男女別にみると、男性では「300 万円未満」、「450 万～600 万円未満」、「1,200 万円以上」の割合がいずれも 15.0%と最も高く、女性では「300 万円未満」が最も高い 30.5%で、次いで、「300 万～450 万円未満」（15.8%）であった。「平成 25 年分民間給与実態統計調査」（国税庁、2014）によると、年間の平均給与は 414 万円であり、男女別では、男性 511 万円、女性 272 万円と報告されていることから、オリンピアンの年収実態は国民全体の平均給与額と同等といえる。

表 25　オリンピアンの現在の年収（n＝362）

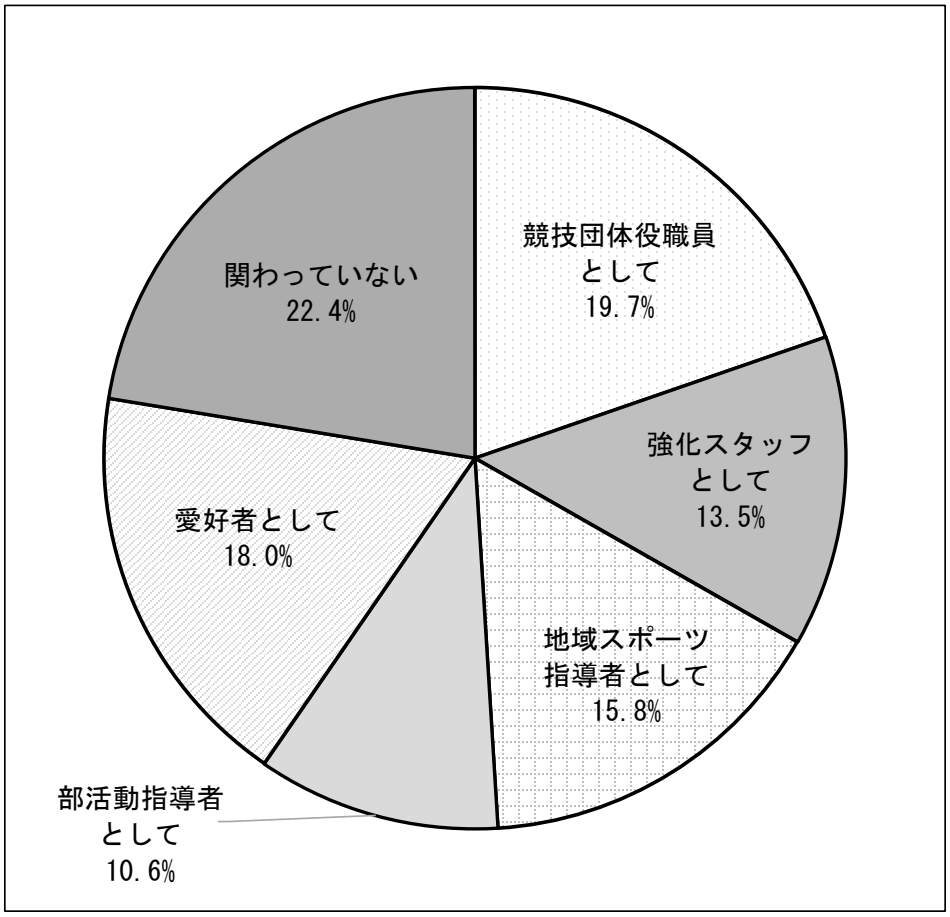
（%）

年収	全体(n=362)	男性(n=267)	女性(n=95)
収入はなかった	3.9	2.2	8.4
300万円未満	19.1	15.0	30.5
300万～450万円未満	14.4	13.9	15.8
450万～600万円未満	14.1	15.0	11.6
600万～750万円未満	9.4	9.4	9.5
750万～900万円未満	11.0	12.4	7.4
900万～1,200万円未満	8.0	10.1	2.1
1,200万円以上	13.0	15.0	7.4
答えたくない	7.2	7.1	7.4

４−７　引退後の競技との関わり

オリンピックに出場した競技との現在の関わりをみると、「競技団体役職員として」が 19.7%と最も多く、以下「愛好者として」（18.0%）、「地域スポーツ指導者として」（15.8%）、「強化スタッフとして」（13.5%）、「部活動指導者として」（10.6%）の順であった（図 20）。約 8 割のオリンピアンが、競技団体に従事して競技の普及や強化に携わったり、地域のスポーツ現場で指導者として活躍したり、自身も愛好者として競技を続けたりしている。一方、競技とは「関わっていない」オリンピアンは 2 割にのぼった。

図 20　オリンピアンの引退後の競技との関わり（n＝406）



５．考察

本調査の目的は、わが国のオリンピアンのキャリアに関する基礎資料の収集であり、調査の結果は、3 つの側面（時間性、コミットメント性、キャリア性）に分けて考察できる。この 3 つの側面は、各国オリンピック委員会におけるキャリアプログラム実施者を中心に、2000 年から定期的に一堂に集うフォーラム「International Athletes Service Forum（IASF）」の 2006 年大会で報告された「Retirement & Post Games Transition」（Keith Bryant）を参考にしている。

アスリートキャリアの「時間性」側面となる競技経験に関する項目では、表 8「競技経験の過程における年齢」（p.12）の回答をみると、オリンピック出場にいたるまでには平均 10 年の年月がかかることが明らかになった。これは、上記 IASF の報告にある「オリンピック出場までの道は 12～13 年と長い」とほぼ一致する。また、オリンピアンの競技人生では、人格形成や心理社会的発達に影響する中学・高校・大学期に、競技に長く専心しているという時間的特性が観察された。今後、競技別などの追跡調査をすることで、わが国のアスリートの実態により即したデュアルキャリアプログラムを構築する素地となるだろう。

オリンピックに出場した競技以外の競技経験の結果（2-2, p.16）では、本調査回答者 473 人のうち、半数以上の 264 人が他競技を実施していた。他の競技を実施した年代は、図 4 によると小中学校期が多かった。これは、オリンピアンの多様な競技に対応できる基本的な運動能力の高さも推察されるが、同時に、そのスポーツキャリア経験自体が、のちのオリンピック出場競技の成績や、引退後のアイデンティティ再構築にどう影響したかは興味深い。たとえば、多様な競技実施経験の開始理由および継続理由などは、その興味のひとつに含まれる。単に楽しいから、好きだからさまざまな競技を実施していただけなのか。それとも、自身がオリンピックに出場する競技の競技力を高めるためだったのか。それらの理由の探求は、アスリートキャリア研究のなかでも、トップアスリートのキャリア研究において重要な考察因子のひとつ、「アスレティック・アイデンティティによる競技引退時の心理葛藤」との関係性の研究領域において新たな課題になると考える。（アスレティック・アイデンティティ:自分を選手だと考えたり感じたりする度合い Brewer, 1993）

またアスリート・アントラージュ（アスリートのパフォーマンスを最大限に発揮できるよう連携協力する関係者）の観点から考えても、多様な競技経験で培ったアントラージュが、のちにオリンピックに出場する競技に専心していく経過のなかで、どのようにオリンピアン自身の支援になっていたかといった調査領域の拡充にも、本調査が貢献できよう。

次に、アスリートキャリアの「コミットメント性」側面となる競技の開始と継続の要因、および引退の理由について考察する。まず、ここでの特徴的な点は、競技の開始時と継続時において、内発的なモチベーションに関わる理由がそれぞれ高いことだった。たとえば、2-3 図 6（p.21）に示した開始理由では、「最もあてはまる」に「当該競技への興味」（42.4%）「身体活動が好きだから」（37.0%）が上位にある。また、図 7 の継続要因では、「最もあてはまる」に、「記録・競技会への挑戦と目標達成」（74.8%）「競技技術や身体能力の向上」（56.7%）「競技が楽しい」（51.8%）が上位にあった。本調査は、これらの理由選択で複数回答を可能としたので、内発的なモチベーションが自身の最大で唯一の理由でなかったとしても、理由のひとつとして回答に入れる可能性はあり、それゆえ

の高い数値であることはあり得る。一方、たとえば、オリンピアン自身の顕在的な意識では、競技開始の「きっかけ」が親やコーチに勧められたからであったとしても、競技を継続するかどうかは自身の判断なので、アスリートキャリアにおけるいくつものトランジション（負けや失敗の繰り返し、あるいはケガや選考漏れといった挫折経験のすべて）の中、それでも競技を続けた理由には、外発的報酬といったモチベーションや他人からの影響だけではない、根源的な内発的モチベーションがあるとも考えられる。しかし、ここでさらに興味深いのは、4-2 図 14 および 15（p.32,33）の引退理由の結果をみると、これらの内発的な理由がなくなって引退したのではないと読み取れることである。引退理由で最も多い回答は「仕事を優先するため」、次に「年齢による体力的な問題」であり、内発的なモチベーションである「競技を楽しめなくなったため」や「自己の成績に満足したため」は少なかった。つまりこれは、競技はまだ楽しく自己の成績にも満足していないが、体力的な限界を感じると同時に、年齢的に仕事を優先せざるを得なくなったことで引退したという心理的状況の可能性がうかがえる。

コミットメント性に関する調査の結果は、今後のわが国における「アスリートに必要な主体性教育」を考える基礎資料としても重要な役割を持つ。近年、スポーツ基本計画の政策目標「トップアスリート等に対してのデュアルキャリアに関する意識啓発」に基づき、2013 年度に日本スポーツ振興センター（JSC）が実施した「デュアルキャリアに関する調査研究」において、アスリートのための、競技人生だけでなく人としての人生を包括的に考えるキャリアプログラム構築と、アスリートの主体性や自主性を育むための専門プログラムの開発の必要性が示されている。その理由は、JSC の調査では、アスリートが競技を継続する過程での学校選択の動機として、主体性を持った回答が 30%程度であったという考察がひとつにあるからである。しかし、本調査結果では、競技開始理由と継続理由において、内発的なモチベーションに関わる、いわゆる主体性のある理由が多数を占めた。これらの調査結果それぞれを俯瞰的にみると、競技を実施すること自体には主体性はあるが、競技継続に関わる環境選択に主体性は持たない、あるいは持つ意味がないといった競技環境特有の理由の可能性もみえる。同時に、引退時には競技継続に内発的モチベーションを残したまま、次のキャリアへ向かう心理状況が読み取れるため、アスリートの主体性は引退というキャリアトランジションでは、どう変容していくのかも解明する必要があろう。コミットメント性側面においては、本調査で浮き彫りになったさまざまな課題を、アスリートそれぞれの心理プロセスは個々に異なるという前提をふまえて、質的な調査を実施することでさらに分析していきたい。

参考として、わが国で検討が必要とされているアスリートの主体性教育については、諸外国における実践事例や既存研究の汎用が難しいことを各国オリンピック委員会のアスリートキャリアプログラムに精通している心理学者 Paul Wylleman 博士が述べている（アジア南太平洋国際スポーツ心理学会, 2014）。Wylleman によれば、主体性を育むための教育は欧米のアスリートには必要なく、逆に個人主義に偏りすぎるという問題がある。欧米のアスリートにとっては、主体的を超えて独断的になりすぎるアスリートへの調和の教育の方が大事かもしれないといわれている。ゆえに、わが国におけるアスリートのための主体性教育については、わが国独自にさらなる研究と分析を進める必要がある。

最後にアスリートキャリアの「キャリア性」側面について考察する。ここでは、競技を継続するための経費や、引退後のキャリア選択から現在の年収、引退後の現在の競技との関わりをたずねた。まず「夏季・冬季大会別にみる競技を継続するための年間経費の自己負担額」を示した 3-2 表 21（p.26）では、冬季大会出場の女性の平均負担額は 460.9 万円で、夏季大会出場の男女、冬季大会出場の男性それぞれの平均負担額 200 万円台を大きく上回った。一方、4-2 図 14 および 15（p.32,33）夏季・冬季大会別のオリンピアンの引退理由のひとつである「金銭的な問題」をみると、夏季の男性（7.1%）、女性（3.9%）であったのに対して、冬季は男性（13.0%）女性（30.4%）とも上回った。これら経費と引退理由の結果から、冬季競技における経費負担の大きさが明示されたとともに、特に冬季競技の女性アスリートに対する金銭的なサポートシステムの重要性が示唆された。

これまでわが国では、オリンピアンの現役時代の経費に関した具体的な金額を含む質問調査は前例がなく、この事実を心理的側面で考えれば、本調査はオリンピアンにとって客観的に競技継続にかかった経費について思考する機会となったといえる。思考する、あるいは客観的に振り返る機会がなければ、「自身が気づいていなかった事実は何か」の顕在化はできない。こういった「自身の競技継続にかかる経費について客観的に考える」といった思考の機会を、アスリートのキャリア教育プログラムでおこなっている諸外国の事例は多い。たとえば、米国オリンピック委員会（USOC）は、2004 年アテネオリンピック・パラリンピック大会の直後に、すべてのオリンピアンとパラリンピアンに対して「Post-Olympic & Paralympic SUMMIT」を開催し、そのなかでファイナンシャルセミナーをおこなっている。そのほかでは、キャリアプログラムにファイナンシャルマネジメントを導入している事例は、ニュージーランド、オーストラリア、カナダなどがあげられる。現役時代に、オリンピアンが「自身が競技をしているとどれだけの経費がかかり、その出元はどこなのか、さらに、その出元は、なぜ自分の競技に予算をかける、投資をするのか。その予算や投資は、自分ではなく、相手にとっての何の利益展望ゆえの計上なのか」と気づくプロセスは、競技環境によって異なる。それをふまえた上で、今後さらに、経費についての知識の必要性も、さまざまな視野からとらえて議論していくべきだろう。

4-1 表 22（p.31）にある引退年齢の回答では、全体の平均年齢は 29.9 歳であり、この結果は、2014 年度に JSC が実施した「デュアルキャリアに関する調査研究」で引退アスリート 82 名が答えた平均引退年齢 30.5 歳と、ほぼ一致した。また、本調査の結果では、引退年齢に最年長 70 歳という回答もあった。これは当該競技のマスターズ大会への参加、あるいは、継続的に地域リーグなどで愛好していた可能性があると捉えた。

本調査の引退後のキャリア選択についての結果は、今後のさらなる研究の基盤として重要な足がかりをみた。たとえば 4-1 表 22「オリンピアンの引退年齢」と、4-2 図 14 および 15「夏季・冬季大会別のオリンピアンの引退理由」、4-4 図 17「オリンピアンの現在の職業の選定理由」の、それぞれの結果を重ねると「年齢による体力的な問題」、および「仕事を優先するため」に、平均年齢 29.9 歳で引退し新たな人生の一歩としての勤務先を選択した人もいれば、勤務先の選択時にはまだ現役であり、競技の継続が目的で勤務先を選択した人もいたと推察できる。一般的に、「キャリア」の意味には「社会的な役割としての名称」や「職務経験」といった客観的側面（客観的に何歳でどのよう

な職務についたか）の意味だけでなく、主観的側面（アイデンティティやセルフイメージに関わる諸経験）の意味が内包される。となると、オリンピアンにとってのキャリアは、主観的側面からみれば、キャリアの意味するものが、ファーストキャリア（アスリートとしての自分）である現役時代から、セカンドキャリア（競技続行のために、アスリートの自分、あるいはスポーツ人としての自分を継続しながら、仕事に関わる）を経て、サードキャリア（アスリートとしての自分、あるいはスポーツ人としての自分から離れた新しいキャリア）と人生が移行していくなかで変容していく可能性が示唆される。つまり、競技を続けるためのキャリア選択と、アスレティック・アイデンティティが外れた自己が引退後に選ぶキャリアとは、まったくキャリアの意味が異なることが推察できる。このアスリート特有の競技引退にともなう心理状況は、「競技引退に伴うアイデンティティ再体制化プロセス」（豊田・中込, 2000）などとも重ねながら継続的な分析が必要であり、本調査はその貴重な基礎資料となった。

本調査では、日本オリンピック委員会と日本オリンピアンズ協会のご協力を得て、登録会員 964 人のうち 473 人のオリンピアンにご回答いただいた。回答者の平均年齢は 56.8 歳で、このうちほぼ半数が 60 歳以上であり、回答者全体の 8 割を 40 歳以上が占めた。2020 年東京オリンピック・パラリンピック大会以降を見据え、次世代のオリンピアンの競技環境の整備や引退後のキャリアに関する情報共有などを充実させるためにも、若年層も含め、オリンピアンからの協力が得られる体制の確立が期待される。

近年、わが国のオリンピアンのキャリアに関しては、「アスリートライフスタイル」「デュアルキャリア」といった名称で調査研究を進めながら、オリンピックを目指すジュニアアスリートを含む現役オリンピアンが、現役のうちからアスリートとしての能力発揮と引退後の人生を見据えての人としての能力発揮を、バランス良くではなく、互いに相乗効果（シナジー）を生みながら推し進める包括的なアスリートキャリアプログラムの構築が検討されている。そのための情報収集のひとつとして、本調査は重要な役割を果たし、新たに多様な課題を明確にしたと考える。特に、オリンピアンの引退時のキャリアトランジションにおいては、本調査の結果から様々なオリンピアンの心理的背景に関する拡張的な仮説を推考できたことは、質的調査の手がかりとして重要であった。今後も、諸外国の実践事例や調査研究結果を参考にしながら、同時にわが国のこれまでのオリンピアンのキャリア変遷の実態を一つひとつ把握し、わが国ならではのキャリアプログラムを構築することが期待される。

最後に、わが国のオリンピアンのキャリアについて悉皆的な調査を実施することができたことについて、ご協力いただいたオリンピアン、日本オリンピック委員会、日本オリンピアンズ協会に、心より御礼申し上げます。

参考文献：金井壽宏著「働くひとのためのキャリア・デザイン」PHP 新書，2002
Keith Bryant, 「Retirement & Post-Games Transition」International Athletes Service Forum（IASF）発表資料（2006）

付録－調査票

No.10001

オリンピアンのキャリアに関する実態調査
調査票

＜　お願い　＞

1　この調査は、公益財団法人日本オリンピック委員会と特定非営利活動法人日本オリンピアンズ協会のご協力のもと、笹川スポーツ財団が実施するものです。
（ホームページ　http://www.ssf.or.jp）

2　当財団は、このたびオリンピアンの実態を把握することを目的として「オリンピアンのキャリアに関する実態調査」を実施することといたしました。本調査はオリンピアンの現役時と引退後のキャリアを把握する内容になっております。

3　この調査は、特定非営利活動法人日本オリンピアンズ協会に登録のある全ての会員を対象としています。

4　ご回答いただいた内容は全て統計的に処理し、個々の回答をそのままの形で公表したり、調査目的以外に利用したりすることはありません。

5　調査に回答いただく時点は、平成 26（2014）年９月１日現在の状況でお答えください。

6　回答のご記入が終わりましたら、同封の返信用封筒を用いて、11 月 14 日（金）までに郵便ポストにご投函ください。

7　この調査の実施業務は、調査機関である株式会社サーベイリサーチセンターに業務委託しておりますので、記入方法等のご質問は、下記担当者までお問い合わせください。なお、その他ご不明な点がありましたら、笹川スポーツ財団の調査担当者までご照会ください。

8　調査の趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

2014 年 10 月

【調査実施】
公益財団法人　笹川スポーツ財団
〒107-6011 東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル 11F　　担当：吉田・髙橋
Tel. 03-5545-3303　Fax. 03-5545-3305　E-mail. data@ssf.or.jp

【調査協力】
公益財団法人　日本オリンピック委員会
特定非営利活動法人　日本オリンピアンズ協会

【業務委託】調査の記入方法、配布・回収に関するお問い合わせ
株式会社　サーベイリサーチセンター
〒116-8581　東京都荒川区西日暮里 2-40-10　　担当：鈴木・佐藤・小林
Tel. 0120-974-658　Fax. 03-3802-6831　E-mail. suzu_taka@surece.co.jp

＜ ご記入にあたってのお願い ＞

1．このアンケートは、**オリンピアン（オリンピック出場経験者）ご本人様**がお答えください。
2．ご回答は、下記のとおりにお願いいたします。
①回答が選択式の場合
該当する選択肢の番号（数字）に○をお付けください。また、質問によっては**1つだけ**○をお付けいただくものや、**該当する選択肢全てに**○をお付けいただくもの（複数回答）がありますので、ご注意ください。
②回答が数字の記入または自由記述式の場合
数字または具体的な内容をご記入ください。

はじめに、あなたご自身についておたずねします

問1．**性別**（○はひとつ）

男性	女性
1	2

問2．**年齢**（数字をご記入ください）
※2014年9月1日現在の年齢をお答えください。

年齢	＿＿＿＿＿＿ 歳

問3．オリンピックに出場した競技（種目）、出場年、開催都市、成績、出場時の所属をお答えください。
※複数大会に出場された場合、すべての大会についてお答えください。（夏季・冬季いずれも含む）
※一つの大会において複数種目に出場された場合、成績の最も良かった種目についてお答えください。

出場回	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
出場競技（種目）	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿
出場年（西暦）	＿＿＿＿＿＿年	＿＿＿＿＿＿年	＿＿＿＿＿＿年	＿＿＿＿＿＿年	＿＿＿＿＿＿年
オリンピック開催都市	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿	＿＿＿＿＿＿
成績（○はひとつ）	1．メダリスト	1．メダリスト	1．メダリスト	1．メダリスト	1．メダリスト
	2．4～8位	2．4～8位	2．4～8位	2．4～8位	2．4～8位
	3．25位以内	3．25位以内	3．25位以内	3．25位以内	3．25位以内
	4．上記以外	4．上記以外	4．上記以外	4．上記以外	4．上記以外
出場時の所属（○はひとつ）	1．民間企業	1．民間企業	1．民間企業	1．民間企業	1．民間企業
	2．自衛官・警察官	2．自衛官・警察官	2．自衛官・警察官	2．自衛官・警察官	2．自衛官・警察官
	3．2以外の公務員	3．2以外の公務員	3．2以外の公務員	3．2以外の公務員	3．2以外の公務員
	4．教職員	4．教職員	4．教職員	4．教職員	4．教職員
	5．大学生・院生	5．大学生・院生	5．大学生・院生	5．大学生・院生	5．大学生・院生
	6．高校生	6．高校生	6．高校生	6．高校生	6．高校生
	7．その他	7．その他	7．その他	7．その他	7．その他

競技の現役時についておたずねします

問4．競技を開始した年齢から、はじめてオリンピックに出場した年齢までをお聞かせください。
（それぞれ**数字でご記入**ください）

オリンピックに出場した競技を開始した年齢	＿＿＿＿＿＿ **歳**
都道府県大会に出場した年齢	＿＿＿＿＿＿ **歳**
日本選手権大会に出場した年齢	＿＿＿＿＿＿ **歳**
最初にオリンピック出場を目標にした年齢	＿＿＿＿＿＿ **歳**
はじめてオリンピックに出場した年齢	＿＿＿＿＿＿ **歳**

問5．オリンピックに出場した競技以外に、各年齢期において取り組んだ競技があればお答えください。

競技名	実施した年齢 （複数回答可）	形態 （○はひとつ）	競技レベル （○はひとつ）
記入例： 体　操	1. 13 歳未満 (2.) 13～15 歳 (3.) 16～18 歳 4. 19 歳以上	(1.) スポーツ少年団等の地域のチーム 2. 運動部活動・体育会 3. 民間スポーツクラブ 4. 競技団体の強化プログラム	1. 市町村大会以下 2. 都道府県大会 (3.) 全国大会 4. 国際大会
＿＿＿＿＿＿	1. 13 歳未満 2. 13～15 歳 3. 16～18 歳 4. 19 歳以上	1. スポーツ少年団等の地域のチーム 2. 運動部活動・体育会 3. 民間スポーツクラブ 4. 競技団体の強化プログラム	1. 市町村大会以下 2. 都道府県大会 3. 全国大会 4. 国際大会
＿＿＿＿＿＿	1. 13 歳未満 2. 13～15 歳 3. 16～18 歳 4. 19 歳以上	1. スポーツ少年団等の地域のチーム 2. 運動部活動・体育会 3. 民間スポーツクラブ 4. 競技団体の強化プログラム	1. 市町村大会以下 2. 都道府県大会 3. 全国大会 4. 国際大会
＿＿＿＿＿＿	1. 13 歳未満 2. 13～15 歳 3. 16～18 歳 4. 19 歳以上	1. スポーツ少年団等の地域のチーム 2. 運動部活動・体育会 3. 民間スポーツクラブ 4. 競技団体の強化プログラム	1. 市町村大会以下 2. 都道府県大会 3. 全国大会 4. 国際大会
＿＿＿＿＿＿	1. 13 歳未満 2. 13～15 歳 3. 16～18 歳 4. 19 歳以上	1. スポーツ少年団等の地域のチーム 2. 運動部活動・体育会 3. 民間スポーツクラブ 4. 競技団体の強化プログラム	1. 市町村大会以下 2. 都道府県大会 3. 全国大会 4. 国際大会
＿＿＿＿＿＿	1. 13 歳未満 2. 13～15 歳 3. 16～18 歳 4. 19 歳以上	1. スポーツ少年団等の地域のチーム 2. 運動部活動・体育会 3. 民間スポーツクラブ 4. 競技団体の強化プログラム	1. 市町村大会以下 2. 都道府県大会 3. 全国大会 4. 国際大会
＿＿＿＿＿＿	1. 13 歳未満 2. 13～15 歳 3. 16～18 歳 4. 19 歳以上	1. スポーツ少年団等の地域のチーム 2. 運動部活動・体育会 3. 民間スポーツクラブ 4. 競技団体の強化プログラム	1. 市町村大会以下 2. 都道府県大会 3. 全国大会 4. 国際大会

（次のページへ）

問6．オリンピックに出場した競技を始めたきっかけはどのようなものですか。
以下のそれぞれの理由のうち、最もあてはまるものを５、最もあてはまらないものを１とし、
その数値に○印をつけてください。（○はそれぞれひとつずつ）

	（あてはまらない）				（あてはまる）
1）親の影響・親のすすめ	1	2	3	4	5
2）兄弟・姉妹からの誘い	1	2	3	4	5
3）友人からの誘い	1	2	3	4	5
4）教員・指導者からのすすめ	1	2	3	4	5
5）当該競技への興味	1	2	3	4	5
6）身体活動が好きだから	1	2	3	4	5
7）勝負が好きだから	1	2	3	4	5
8）有名なアスリートへの憧れ	1	2	3	4	5

問7．オリンピックに出場した競技を継続したモチベーションはどのようなものですか。
以下のそれぞれの理由のうち、最もあてはまるものを５、最もあてはまらないものを１とし、
その数値に○印をつけてください。（○はそれぞれひとつずつ）

	（あてはまらない）				（あてはまる）
1）記録・競技会への挑戦と目標達成	1	2	3	4	5
2）競技技術や身体能力の向上	1	2	3	4	5
3）勝負が好き	1	2	3	4	5
4）競技が楽しい	1	2	3	4	5
5）名声をあげたい	1	2	3	4	5
6）周囲の期待にこたえたい	1	2	3	4	5
7）競技の普及に貢献したい	1	2	3	4	5
8）収入が得られる	1	2	3	4	5

問8．現役中、競技にかかる経費は主にどなたが管理していましたか。（○はひとつ）

1	ご本人	4	競技団体
2	親族	5	マネジメント会社
3	指導者	6	その他

問9．競技を継続するために、年間におおよそいくらの経費がかかりましたか。
オリンピック出場**前年度に個人で負担された経費の総額**でお答えください。
複数回出場された方は、最後に出場したオリンピックの前年でお答えください。
（例：2000 年シドニー大会出場者は 1999 年度の年間経費）

経費総額	_____ 万円

SQ1．上記の総額のうち、以下の項目で**経費がかかった順に番号**をつけてください。
（回答欄に**番号を「1」から順に**お付けください）

	大会遠征費		ウェア／シューズなどを含む用具代
	指導者に関連する経費		メディカル・コンディショニング
	トレーニング施設利用料		その他（具体例：　　）

問１０．競技にかかる経費は、どのように確保していましたか。
該当する番号に○をつけ、その割合をお示しください。（複数回答可）
※該当はしているものの割合が不明の場合は、番号に○のみをお付けください。

1	自己財源	＿＿＿＿＿＿ %
2	強化費	＿＿＿＿＿＿ %
3	親族からの支援	＿＿＿＿＿＿ %
4	その他	＿＿＿＿＿＿ %

→ ***問１０で「2強化費」をお答えの方にお尋ねします。***

SQ1．強化費は以下のどの組織から受給していましたか。（複数回答可）

1	JOC	5	自治体
2	競技団体	6	大学・高校
3	日本スポーツ振興センター	7	その他（　　）
4	企業スポンサー		

問１１．強化費の使途について、該当するものに○をつけてください。（複数回答可）

1	大会遠征費	6	メディカル・コンディショニング
2	強化合宿費	7	生活費補助
3	指導者に関連する経費	8	その他（　　）
4	トレーニング施設利用料	9	使途に取り決めはなかった
5	ウェア／シューズなどを含む用具代		

現役選手への質問は以上です。

ご回答ありがとうございました。

現役を引退された方は、６ページへお進みください。

現役を引退された方へおたずねします

問１２．何歳で現役を引退されましたか。（数字をご記入ください）

引退年齢	＿＿＿＿＿＿ 歳

問１３．引退の理由はどのようなものですか。（複数回答可）

1	自己の成績に満足したため	5	競技を楽しめなくなったため
2	年齢による体力的な問題	6	けが
3	金銭的な問題	7	その他（　　）
4	仕事を優先するため		

問１４．現在のご職業はどのようなものですか。生計を立てる給与を受けるものをお選びください。
主婦や学生の方は、「7. その他」へご記入ください。（○はひとつ）

1	会社役員　⇒　SQ1へ	5	自衛官・警察官
2	会社員　⇒　SQ1へ	6	教職員
3	自営業　⇒　SQ1へ	7	その他（　　）
4	競技団体役職員		

→ SQ1．現在の勤務先はどのような業種ですか。（○はひとつ）

1	農林漁業	9	金融・保険業
2	鉱業	10	不動産業
3	建設業	11	飲食店・宿泊業
4	製造業	12	医療・福祉
5	運輸業	13	教育・学習支援業
6	電気・ガス・熱供給・水道業	14	サービス業
7	情報通信業	15	その他（　　）
8	卸売・小売業		

問１５．現在の勤務先を選んだ主な理由を１つお答えください。（○はひとつ）

1	仕事の内容に興味があった	5	労働時間、休日等の条件がよい
2	能力・個性・資格が生かせる	6	通勤が便利
3	勤務先の将来性が期待できる	7	とにかく仕事に就きたかった
4	給料等収入が多い	8	その他（　　）

問１６．現在の勤務先に入職した時の経路（あっせん機関等）についてお答えください。（○はひとつ）

1	安定所（ハローワーク）	6	以前に勤めていた会社
2	ハローワークインターネットサービスやしごと情報ネットを見て応募	7	縁故（友人・知人等も含む）
3	ＪＯＣや競技団体のキャリアサポート事業	8	広告（求人情報誌・インターネット等も含む）
4	民営職業紹介所（学校を除く）	9	その他（　　）
5	学校（専修学校等も含む）		

問１７．現在の勤務先の雇用形態は次のどれですか。（○はひとつ）

1	正規雇用者	4	アルバイト・パートタイマー
2	契約／嘱託社員	5	その他（　　）
3	派遣社員		

問１８．現在の年収（税込）は、おおよそどれくらいですか。さしつかえなければお答えください。（○はひとつ）

1	収入はなかった	6	７５０万～９００万円未満
2	３００万円未満	7	９００万円～１，２００万円未満
3	３００万～４５０万円未満	8	１，２００万円以上
4	４５０万～６００万円未満	9	答えたくない
5	６００万～７５０万円未満		

問１９．現在、ご自身がオリンピックに出場した競技とどのように関わっていますか。（○はひとつ）

1	競技団体役職員として	5	愛好者として
2	強化スタッフとして	6	関わっていない
3	地域スポーツ指導者として		
4	部活動指導者として		

質問は以上です。

ご回答ありがとうございました。

11 月 14 日までに同封の返信用封筒にてご返送ください。

オリンピアンのキャリアに関する実態調査 報告書

2015 年 3 月発行

発行者　公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-6011　東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル 11F

TEL　03-5545-3303　FAX　03-5545-3305

E-mail　info@ssf.or.jp　URL　http://www.ssf.or.jp/

無断転載、複製および転訳載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。

本事業は、ボートレースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。